厚生労働省「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」

アートセンター集 報告書 2017-18

社会福祉法人みぬま福祉会

障害のある人のアートで未来をひらく！

埼玉県では、「福祉の現場から、障害のある人たちの表現の魅力を発信し、そのアートのパワーで、よりよい未来をつくっていこう！」といった思いを一つに、福祉施設職員をはじめ、県や協力委員、作家や家族、様々な機関や専門家、地域の人たちなど、多くの人々が力を合わせて活動してきました。アート企画展を中心とした展覧会を開催して、障害のある人たちの表現活動の支援と普及に努めています。また、表現活動状況調査で毎年、新たな表現を発掘。福祉施設の職員と美術の専門家などが多様な視点を交えて作品選考を行いながら、表現の魅力やアートの可能性を探求しています。

昨年度からは、「平成28年度厚生労働省障害者の芸術活動支援モデル事業」の助成を受け、障害のある人の芸術活動支援の拠点となる「アートセンター集」を開設しました。また、福祉施設の職員たちを中心に埼玉県障害者アートネットワークＴＡＭＡＰ±○（タマッププラマイゼロ）をつくり、みんなで学び高め合い、支援を広げることに努めています。

今年度は「平成29年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業」の助成を受け、活動を行いました。みんなで支援の力を育み、埼玉独自の障害者芸術支援活動「埼玉方式」を発展させ、さらに多様な表現やその価値を社会へ広げるために、活動の成果を報告いたします。

はじめに …… 02

Ⅰ 事業概要

i アートセンター集とは …… 04
ii 活動について …… 06
<ホームページ> リニューアル! …… 08

Ⅱ 活動報告 …… 09

i みんなでつくる　ネットワーク活動
―多様な表現を発掘･発信する 埼玉独自の支援の取り組み―

● 埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±○ …… 10
● みんなでつくる展覧会のSTEP …… 12
● 定例会･特別講義 …… 14
● 表現活動状況調査 …… 20
● 作品選考会 …… 22

ii つながり育む　4つの展覧会 ― 作品展&グッズ展&作家イベント ―
4つの展覧会と作家イベント …… 26

1「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」 …… 28
2 織り&グッズ展 ツグズムズ10 …… 30
3 第8回埼玉県障害者アート企画展 …… 32
4「うふっ♥埼玉でまたまたこんなのみつけちゃった♪」 …… 36
● 来場者投票上位10名作家紹介 …… 38
● それぞれの深まり広がり …… 40
● アンケートまとめ …… 42

iii 新たな挑戦　ダンスWS&公演 …… 46
ダンス公演「あはっ★埼玉でこんなこともやっちゃった♪」 …… 50

iv 学び広げる　さまざまな研修会
① 障害者芸術支援シンポジウム …… 54
② 権利保護や商品化に関するセミナー …… 66
● グッズ研修会 …… 68
● アトリエ見学ツアー …… 69
● インターンシップ研修

v 支えつなぐ　相談窓口
● 相談支援 …… 70
● 相談分類表 …… 71
● 相談事例×7 …… 72
<広報> 掲載記事 …… 76

Ⅲ まとめ

i 支援のいま ― 支援の現状と活動の成果 ― …… 78
ii 活動のこれから ― 課題を踏まえて、今後の展望 ― …… 84

施設紹介　みぬま福祉会「工房集」の理念と取り組み …… 86

Ⅰ 事業概要 ⓘ アートセンター集とは

埼玉県障害者
芸術文化活動支援センター

アートセンター集

その根底にあるのは、一人ひとりが主体的に生きていること。豊かに生きていること。楽しく暮らしていること。人間らしく、生き生きしていること。そのことを大切にしていること。

工房集は、「そこを利用する仲間だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観を創るためにいろんな人が集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めて「集(しゅう)」と名付けました。

障害の重い人の表現の可能性を模索し続け、その中から生まれた作品を通じて、多くの人とつながり、関わり、新たな可能性が生まれてきています。

そして2016年、厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」の助成を受けて障害のある人、その支援者の課題の解決、また情報交換やネットワークづくりの場として「アートセンター集」をオープンしました。

「表現すること」は、人間が生きることそのもの。

表現活動を通じて、障害の有無に関係なく、人と人とを豊かにつないでいきます。

設立の背景

埼玉県では、2009年から「障害者アートフェスティバル」の一環として毎年、「埼玉県障害者アート企画展」を続けてきました。その開催において、アートディレクターの指導のもと県内の福祉施設職員等が協働でワークショップを重ね、支援のネットワークを築いてきました。

また、工房集は社会福祉法人みぬま福祉会の一施設でもあり、法人の表現プロジェクトを社会に発信する役割を担っています。当法人では、障害の重い仲間(利用者)の仕事を模索する中、1994年頃から表現を仕事にする取り組みが始まりました。2002年には、アトリエ、ギャラリー、カフェ、ショップを備えた工房集を開設。福祉分野だけでなく、アーティストやキュレーターなどの美術関係者と連携しながら、現在は、10ヶ所のアトリエを中心に、120名ほどの仲間たちが仕事として様々な表現活動を行っています。

アートセンター集は、この工房集が長年、実践してきた福祉の理念にもとづく取り組みと「埼玉県障害者アート企画展」で得たネットワークを活かし、「さらに表現と支援を広めていこう!」という機運の高まりにより誕生しました。障害のある人の表現活動やその支援を広めるために、2017年は厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」の助成を受けて、次の事業を行っています。

障害者芸術文化活動普及支援事業　概要　平成29年度　厚生労働省

○「障害者の芸術活動支援モデル事業」(平成26～28年度実施)で培った支援ノウハウを全国展開することにより、障害者の芸術文化活動(美術、演劇、音楽等)の更なる振興を図る。

○ 平成29年度以降は、美術作品のみならず、演劇、音楽等の舞台作品に対する支援体制の充実を図る。

都道府県レベル20ヶ所程度――

■事業内容■

障害者の芸術文化活動(美術、演劇、音楽等)を行う事業所を支援する「支援拠点」を設置し、次の事業を行う。

ア 県内における事業所に対する相談支援(支援方法、著作権保護、鑑賞支援等)、支援者の人材育成、ネットワークづくり、展示会の開催等

イ 事業実施計画や進捗状況の確認、事業実施の協力を行う協力委員会の設置

ウ 芸術作品を制作する障害者や作品の調査・発掘、専門家による評価や企画展による発信等の実施

事業内容

「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートします!

相談窓口

協力委員や専門機関等と連携して、障害のある人やその家族、支援者の「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートしています。

詳細は→P70

障害のある人のアートに関する支援のネットワークを広げます!

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±○(タマップ プラマイゼロ)

福祉施設や事業所で障害のある人たちの表現活動を支援しているメンバーが中心となって、月1回の定例会を行い、展覧会の実践などを通して、学びながら支援の輪を広げています。

詳細は→P10

■参加福祉施設(平成30年3月15日現在)

発足時11団体→現在、25団体

- (医) 双里会 多機能型事業所わっくす
- (社福) ウィング ワーク&ライクのびっこ
- (社福) 川の郷福祉会 おれんじ
- (社福) 久美愛園
- (社福) 啓和会
- (社福) 埼玉医療福祉会 光の家療育センター
- (社福) 埼玉県社会福祉事業団 あげお
- (社福) さいたま市社会福祉事業団
- (社福) ささの会 多機能型事業所ぽとふ館
- (社福) 清心会 障害者支援施設さやか
- (社福) 昴&NPO法人 かうんと5
- (社福) 戸田わかくさ会
- (社福) 新座市障害者を守る会
- (社福) 皆成会 光の園
- (社福) 皆の郷 川越いもの子作業所
- (社福) みぬま福祉会 工房集
- (社福) めだかすとりぃむ

協力委員会

学芸員、アーティスト、教育者、弁護士などの専門家と行政職員と福祉従事者を中心に12名で構成。年2回、協力委員会を開き、事業の計画・運営を検討しています。

- (公社) やどかりの里すてあーず
- NPO法人 CILひこうせん
- NPO法人 織の音アート・福祉協会 織の音工房
- NPO法人 なまずの里福祉会
- NPO法人 ハーモニー
- NPO法人 ゆめたまご
- NPO法人 ゆりかご
- 株式会社とんぼ 就労継続支援とんぼ

■協力委員(敬称略)

石平裕一
(社福) 昴&NPO法人 かうんと5代表

岩本憲武
弁護士/モッキンバード法律事務所

大畠宗宏
一般社団法人埼玉県セルプセンター協議会副会長
(社福) 皆の郷 川越いもの子作業所施設長

小澤基弘
埼玉大学教育学部教授(絵画及び美術教育、画家

酒井道久
彫刻家、埼玉県立大学名誉教授

杉千種
コンテイオ(コーディネート事業)

中津川浩章
美術家、アートディレクター

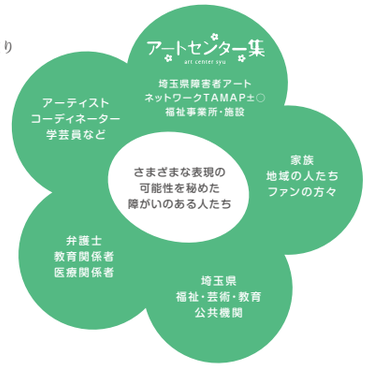
根岸章王
埼玉県福祉部障害者福祉推進課課長

野本翔平
NPO法人CILひこうせん職員
行田市議会議員

日露輝夫
川口市福祉部障害福祉課課長

前山裕司
埼玉県立近代美術館学芸員

山路久彦
(社福) みぬま福祉会総合施設長
埼玉県発達障害福祉協会相談支援部部長



彼らの表現には
固定観念や既成概念を打ち破り
社会に新たな
価値観を生み出す
チカラがある

それを広げて
誰もが生きやすい社会を創る

その共通の
ミッションを持った
人たちが利害を超えて
共に活動しています

埼玉県障害者
芸術文化活動普及支援事業

2017年度 活動計画

〝表現〟を発掘し、発表の場や学ぶ場を企画します！

4つの連動する展覧会に、作家主体のイベントと支援力を高める研修を絡めて、TAMAP±〇の連携力や協力委員の専門性を活かしながら、障害のある人たちを取り巻く様々な人と協力して、表現やその支援を広める活動を行いました。

また、今年度は、美術以外の表現活動にも支援を広げ、ダンスワークショップ＆公演を行いました。

新たな〝表現〟の発掘

2009年から埼玉県が続けてきた「表現活動状況調査」を、2017年から県と協働で行っています。これは、障害のある人の「芸術・文化活動」を把握する実態調査です。絵画や造形、ダンス、詩などのほか、新たな表現を発掘する機会になっています。

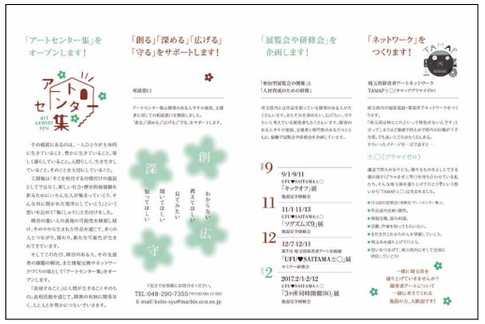
この調査票をもとに毎年、福祉施設職員（TAMAP±〇）と美術の専門家などの多様な視点から表現の魅力を掘り起こし、展覧会などを通して発信しています。詳細は→P20

埼玉県障害者アート企画展の開催

2009年から埼玉県が「埼玉県障害者アートフェスティバル」の一環として埼玉県立近代美術館で開催してきた「埼玉県障害者アート企画展」。2016年の第7回目からは、アートセンター集が事務局を担い、県と協働で行っています。詳細は→P32

連動する「展覧会」「研修」の企画・開催

協力委員でもある専門家等の協力を得ながらTAMAP±〇メンバーが中心となって、「埼玉県障害者アート企画展」と連動する作品展やグッズ展、ダンス公演、研修を年数回、県内にて開催。展覧会に合わせて作家主体のイベント（アーティストトーク、ライブパフォーマンス、ワークショップなど）や支援者に向けた研修（権利保護に関するセミナーやシンポジウム、グッズ研修会、アトリエ見学ツアー、インターンシップ研修など）も行っています。詳細は→P26



リーフレット

第1回協力委員会

2017年度　活動計画

	表現活動状況調査		TAMAP定例会	グッズ研修会	ダンス
2017年4月	……●県より調査票発送・翌月提出締切……●作品選考会……●発信	協力委員会			
		TAMAP±〇定例会	①		
5月		TAMAP±〇定例会・中津川浩章さんによる特別講義	②		
		グッズ研修会		①②	
6月		TAMAP±〇定例会	③		
		グッズ研修会		③④	
7月		TAMAP±〇定例会	④		
		グッズ研修会		⑤⑥	
8月		TAMAP±〇定例会	⑤		
		展覧会「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」 8月22日～9月2日　会場：多機能型事業所わっくす喫茶ゆめいろ(春日部市) ● 作家イベント アーティストトーク			
		グッズ研修会		⑦⑧	
9月		アトリエ見学ツアー			
		ダンスワークショップ			①
		作品選考会・TAMAP±〇定例会	⑥		
		グッズ研修会		⑨	
10月		TAMAP±〇定例会	⑦		
		ダンスワークショップ			②
11月		展覧会「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」織り＆グッズ展　ツグズムズ10 11月1日～12日　会場：工房集（川口市） ● 作家イベント ライブパフォーマンス、ワークショップ			
		アトリエ見学ツアー			
		ダンスワークショップ			③
		TAMAP±〇定例会	⑧		
		ダンスワークショップ			④
12月		展覧会 第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」 12月6日～10日　会場：埼玉県立近代美術館（さいたま市） ● 障害者芸術支援シンポジウム「埼玉県の取り組みから考える」12月9日［講堂］ ● ダンス公演「あはっ★埼玉でこんなこともやっちゃった♪」12月10日［講堂］ ダンス発表！			
		TAMAP±〇定例会	⑨		
2018年1月		インターンシップ研修			
		TAMAP±〇定例会	⑩		
2月		権利保護や商品化に関するセミナー			
		アトリエ見学ツアー			
		TAMAP±〇定例会	⑪		
		展覧会「うふっ♥埼玉でまたまたこんなのみつけちゃった♪」 2月7日～12日　会場：アートギャラリー呼友館（川越市） ● 作家イベント アーティストトーク			
3月		協力委員会			
		TAMAP±〇定例会	⑫		

第Ⅱ章 活動報告

i みんなでつくる　ネットワーク活動

— 多様な表現を発掘･発信する 埼玉独自の支援の取り組み —

- 埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇
- みんなでつくる展覧会のSTEP
- 定例会･特別講義
- 表現活動状況調査
- 作品選考会

ii つながり育む　4つの展覧会

— 作品展&グッズ展&作家イベント —

4つの展覧会と作家イベント

- 来場者投票上位10名作家紹介
- それぞれの深まり広がり
- アンケートまとめ

iii 新たな挑戦　ダンスWS&公演

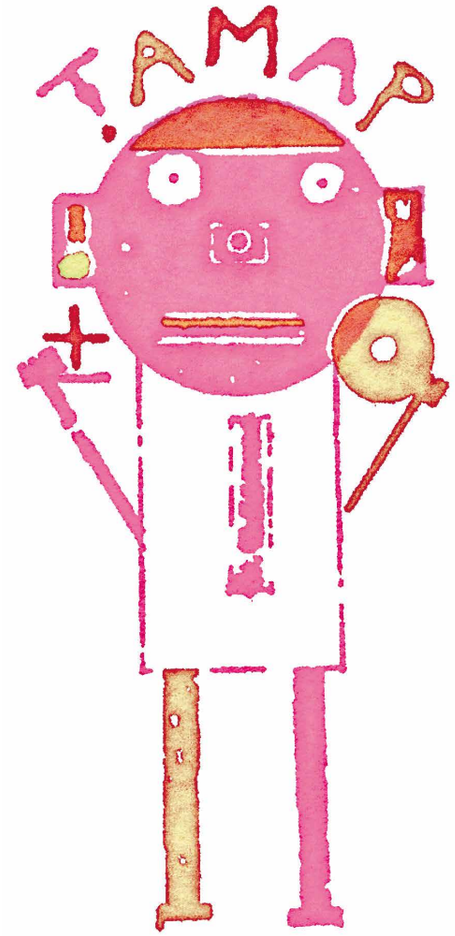
iv 学び広げる　さまざまな研修会

1. 障害者芸術支援シンポジウム
2. 権利保護や商品化に関するセミナー

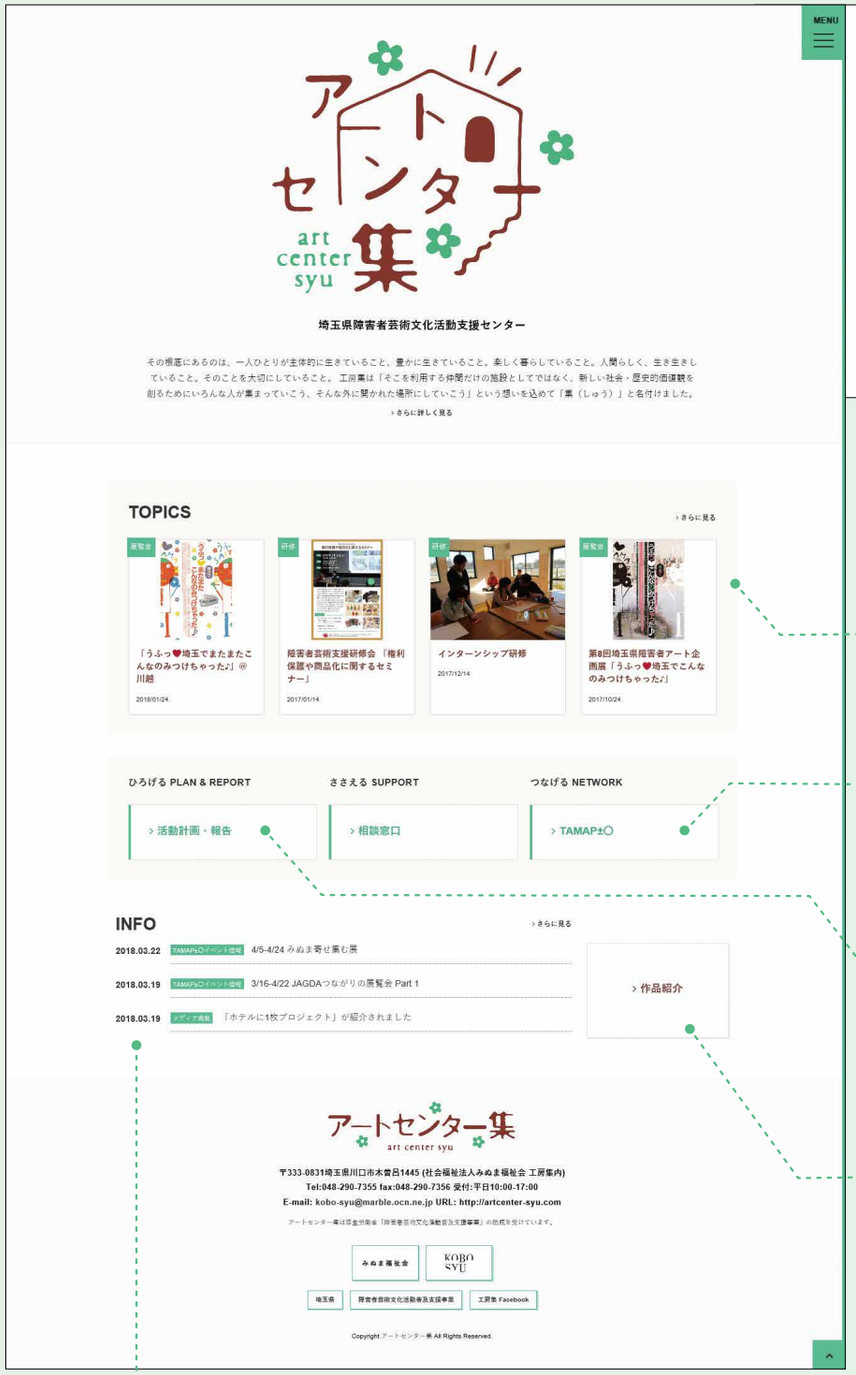
- グッズ研修会
- アトリエ見学ツアー
- インターンシップ研修

v 支えつなぐ　相談窓口

- 相談支援
- 相談分類表
- 相談事例



表現活動と支援の“輪”を広げるために、アートセンター集のホームページをリニューアルしました!



メールでの相談・お問い合わせも送りやすくなりました!

TOPICSでは、展覧会や研修などの情報を発信しています。

TAMAP±〇のページは、各参加団体のホームページとリンクしています。

活動の成果をより広く共有するために、報告書の内容も一部抜粋して紹介しています。

作品紹介のページも新設。過去の展覧会の出展作品がご覧になれます。

INFOでは、活動に関するお知らせに加え、TAMAP±〇参加団体の展覧会やイベントなどの情報も発信しています。

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇

支援のまなざしを育みながら福祉の現場から生まれる未来のアートを発掘・発信！

今年度も「埼玉県障害者アート企画展」を中心に4つの連動する展覧会（作品展×3＋グッズ展×1）を開催しました。福祉施設で表現活動の支援に取り組むTAMAP±〇メンバーが、月1回の定例会で話し合い、企画から運営まですべて協働で行っています。

この展覧会の実践では、単に展覧会の手法を学ぶのではなく、「この表現の魅力は何か」「何のための展覧会か」「アートとは何か」と、常にみんなで考えることを大切にしています。

作品展では、キュレーターである中津川浩章さんのファシリテーションのもと、表現活動をしている障害のある人たちの、創作の様子や支援の関わりなどを語り合いながら、一人ひとりの表現の魅力を探り、アートの可能性を秘めた表現の発掘・発信に取り組んでいます。その過程で表現とじっくり向き合い考えることが、作者と向き合うこと、表現を生む福祉の現場の「支援のまなざし」を育むことにつながっています。

TAMAP±〇の定例会や活動全般でも、それぞれの課題や情報を共有しながら、その「支援のまなざし」は各現場に広がりを見せています。

TAMAP±〇とは？

県内の福祉施設・事業所が中心となって様々な専門家や機関、地域の人たちや行政と連携して、障害のある人の表現活動や支援の輪を広げています。

「埼玉県は特にこれといって特色がないんです」と言ってしまうほど謙虚で控えめで県内の自慢が下手な県。でも良いところはたくさんある。そういったイメージを一言であらわすと…

プラマイゼロ　±〇

埼玉県は「プラマイゼロだ」という障害のあるメンバーの意見に「埼玉をもっとアップ（向上）させたい」「県内のつながりをマッピングしよう」という想いを合わせて「TAMAP±〇（タマッププラマイゼロ）」と命名しました。

謙虚で控え目な中に様々なものを良しとする懐の深さ（ごちゃまぜ上等！）を持ち合わせている。そんな埼玉を盛り上げて行こう！という想いを込めています。

参加福祉施設

11団体からスタートし、現在、20を超える団体が参加。詳細は→P5

体制

- アートセンター集の事務局とTAMAP±〇メンバーが連携して活動。
- 東西南北の支部長が地区の情報等を統括。
- 適宜、協力委員や行政と連携。

定例会

月1回開催。議事録をとり、メンバーが活動や情報を各施設の職員とも共有。情報交換の場、展覧会の企画、セミナーなどの企画を行う。

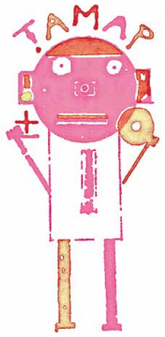
活動

事業計画に即した障害者の表現活動に関する

- 展覧会の企画・運営。
- 研修の実施。
- 情報交換、悩み相談。

さらに、

- 活動や作家を知ってもらう。
- まだまだこれからの人を発掘。
- 埼玉県を盛り上げる。
- 想いをつなぎ、県内、そして全国に発信！



TAMAP±〇の取り組みをご紹介！

日々の支援につなげる展覧会実践

【活動方針】みんなでつくる！

- ○専門家も施設職員もフラットな、みんなで学び合う関係
- ○表現する人も支える人も周りの人もみんなが主体の意識
- ○表現の魅力・可能性・新たな価値をみんなで探り考える
- ○それを共有する場をつくり埼玉の強み「連携力」を生かして障害のある人の表現や支援活動を広める
- ○事務局はメンバーが情報共有できるようフォロー現場の事情に合わせ参加できるゆるやかさも大切にする

いつもここから
スタート！

STEP 0

施設の表現を発掘

表現と向き合い、その魅力を探り、
それを伝え、問うために
様々な人に見てもらう

Nakatsugawa流Facilitationポイント

表現から感じたこと、読みとれることなどを語ったり、表現が生まれた背景や作者についてたずねたり…それぞれの表現の魅力、アート的な視点などに気づく、表現や支援のことを語るきっかけをつくる

みんなでつくる展覧会のSTEP

— 表現とじっくり向き合い
みんなで探り・深め・広める —

STEP 1
コンセプトの検討

何のための展覧会か
誰に、何を、どう発信するか
考える

Nakatsugawa流Facilitationポイント

障害のある人たちの表現活動との関わりで得た気づきや考え、アートと福祉の視点の交錯、活動の社会的意義など、障害者とアートに絡まる様々な事柄や課題を共有して展覧会の目的を考えてもらう

STEP 2
開催地・会場・会期の検討

作品の魅力を伝えるには
どんな地域や空間がいいか
考える

STEP 3
作品選考

自分の目で評価し、それを語り、
様々な視点から作品の魅力を探る
みんなで出展作家を選び出す

Nakatsugawa流Facilitationポイント

自由に選考し、一人ひとりが感じたことを、語り受けとめる関係性をつくる。アートと福祉の異なる視点や多様な価値観をすり合わせ、その豊かさを共有する

STEP 4
展示プラン

見る人に伝えることを
意識して、展示方法や額装を
考える

Nakatsugawa流Facilitationポイント

キュレーターの立場から選考結果を踏まえ、アート的・福祉的魅力を総合的に判断する。メンバーが主体的に関われる部分を残しながら大まかな展示プランを作成、意図を伝える

STEP 5
広報・情報発信

展覧会の目的やコンセプト
作品の見どころなどを伝え広める

STEP 6
作品の展示

見る人の気持ちや他の作品との関係を
考えながら、展示空間で作品の魅力を
どう生かし伝えるか、みんなで考え展示

Nakatsugawa流Facilitationポイント

展示のイロハやバランスなどをアドバイスして、作業は個々に任せる。最終的な展示を調整し、展示された作品を改めて眺め、感じたことを伝え、語ることを大切にする

STEP 7
会場運営・鑑賞支援

来場者・作者・家族・施設職員や
利用者の感動と声を受けとめ、
広く分かち合う

STEP ＋
作家イベント

表現と作者の魅力を広め
来場者と共有するための
接点を考え、場をつくる

STEP 8
振り返り

展覧会での気づきや喜び、
作者や周りの人たちの
変化を語り合い、課題を共有
それらを現場や次の展覧会に
どう活かすか、考える

［TAMAP±〇が大切にしていること］

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇
表現活動支援の現場

展覧会実践を「支援」につなぐ

アートの視点を学びながら
福祉の現場や作品の魅力を語り合う

現場でも表現と向き合い
その魅力や意味を考え語り合う
||
作者一人ひとりとじっくり向き合い
その思いに心を向ける・感じとる

気づきや学びを現場に広げ共有する

支援のまなざしを育む

TAMAP±〇定例会・中津川浩章さんによる特別講義

福祉の視点からアートと社会の未来をひらく

―埼玉独自の展覧会が目指すもの―　2017年5月11日第2回TAMAP±〇定例会より

埼玉県障害者アート企画展では、2011年から3年間にわたり障害者施設等の職員がアートディレクター中津川浩章さんのもとでアートマネージメント研修（15回連続ワークショップ）を重ねて展覧会を行ってきました。その取り組みが現在のTAMAP±〇の展覧会実践に引き継がれています。

2回目の定例会では、新たな参加者と共に自分たちの取り組みを確認し、芸術文化活動普及支援事業として展覧会をなぜやるのか、展覧会をつくるとはどういうことか、埼玉として4つの連動した展覧会をどう発信するかを考えるために、①「障害者アート」を取り巻く社会の動き、②美術的・福祉的視点、③埼玉県独自の「障害者アート」の取り組みについて、中津川さんに講義していただきました。

※以下、議事録より一部抜粋・加筆して掲載

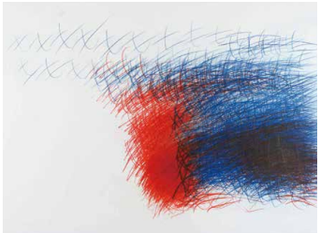
障害のある人のアートは今、世界的に注目を集めています。アートの世界ではアール・ブリュットとして注目を浴びる機会が増え、日本では東京オリンピック・パラリンピックに向けて国や都なども普及を推進し、社会的な関心も高まっています。

アートの源流と障害者アート

一般的に美術は写実的なものと思われがちですが、現代アートには様々な表現形態があり、障害のある人の表現と近い魅力を持った作品がいくつもあります。※以下、スライドを解説。作品画像の掲載は割愛します。

まずは遡って「ラスコーの壁画」。いわば芸術の原点。障害者の表現は、どちらかといえば現代アートよりこういったプリミティブな芸術に近いと思っています。よく見ると馬が首を振った描写や記号なども描き込まれ、彼らなりのコスモロジーや感じている世界を表現している。「未開」といわれる一方、現在では「知的な美術」とも捉えられています。

これは、ジャン・デュビュッフェの作品です。野生的なプリミティブな感覚を持った表現に影響され、描いたものです。彼は、そういった表現には、19世紀後半から20世紀の既存の芸術文化をぶち壊す、人間の深い表現があるとして、既成の芸術文化に毒されていない生（き）のままの芸術「アール・ブリュット」という言葉をつくり提唱しました。自ら精神病院をまわり身銭をきって作品を蒐集し、展覧会を開いた。（近年、アール・ブリュットが、世界で再評価される流れの中、日本では、障害のある人の表現を括る言葉と誤解される広がりがあり、物議を呼んでいますが、）まずは、本来の意味を理解しておいてほしいと思います。



現代アートとの類似・相違

これは、工房集の齋藤裕一さんの作品です。これは、ドラえもんの「も」の字を重ねている作品。こっちはアメリカの現代アーティスト、サイ・トゥオンブリーの作品です。こういった一見、落書きの様に描かれたものは、Scribble系と呼ばれています。2人の作品を見比べると、とてもよく似ていますよね。考えていることはたぶん違うけれど、表れているものが似ている。身体的な感覚が強く、原始的な欲求で線を引く、色を塗り重ねる、パッと見ただけでは意味がわからない。けれど、何かグッとくるものがある。

続いて県内の障害のある人たちの作品と、現代アートの有名作家（パウル・クレー、ジャン＝ミシェル・バスキア、ジャクソン・ポロック、アンリ・マティス、イヴ・クラインなど）の作品（Minimalism、Action painting、点描など）との視覚的な類似点を、いくつもの事例をあげて解説。アート的な視点で作品を読み解きながら、障害のある人たちの創作の様子、障害特性が作品にどう表れているかなどを伝え、現代アートとの違い、障害者の表現がどう生み出されているのか話しを進めていきました。

解説がなければ、障害のある人の作品もすべてモダンアートに見えてくるのではないでしょうか。それほど、現代アートの方

向性と障害者アートの表現は、視覚的にシンクロしています。

それはなぜか。実は、現代アートの作家たちが、障害のある人の表現にインスパイアされ、様々な形式を生み出しました。一方、障害のある彼らは、そういった画法を教わった訳でもなく、多くは作品という意識で作った訳でもない。自分の内側から表現したもの。どちらかといえば、障害のある人たちの作品の方が、オリジン。起源がある。そして、アートの流れが起源を遡ることにより、アール・ブリュットなど純粋で力強い表現に注目が集まるようになりました。埼玉でも、世界的に評価される作家がたくさん出てきています。

僕らにないプリミティブな感覚

これは、和田良弘さんの段ボールで作った箱の作品。最初は何を意味しているか知らずに展示していたのですが、「これを運ぶときは保冷剤を入れないと魂が起きちゃうよ」といわれ、そんな深い意味があったのかと驚きました。以来、展示の仕方も変え、彼の考えや作品の意味が見えるようになりました。

彼らの表現、障害のある人たちの感じ方は、プリミティブな芸術と深いところでつながっているのではないかと思っています。

実際、障害のある人の中には、聴覚や嗅覚といった感覚が、僕らより数倍敏感な人がたくさんいます。最初から様々な色を使い描くのは、その様に感じているから。きっと僕らより、世界を豊かに感じている。その豊かさが、表現に反映しているのではないかと思っています。僕らの祖先も、そんな感覚を持っていて、現代に生きていたら「障害者」としてカテゴライズされていたかもしれません。

障害のある人は、言葉でうまく伝えられないことで、僕らより劣っていると思われがちですが、感覚的には、僕らよりずっと深いもの、失われたものを持っている。けれど感覚が作品にも、しっかり現れている。それが強い分、過敏に反応して暴れたりする。それを薬で鈍麻させ、生きている人がたくさんいます。

アートはなぜ存在するのか。きっと人間の本質的な部分をクリアにしてくれるものだからこそ、素晴らしいと尊重される。その人間の本質的な部分、感覚を、障害のある人たちは包み隠さず出してくる。その表現に、多くの人たちがひきつけられているのだと思います。

アートの評価より大切な価値がある

この現代アートの流れや2020年に向けた動きの中で、今、様々な展覧会が催されていますが、そこで評価される作品だけが広まることには、少し懸念を感じています。

作品としての評価も大事ですが、長年、障害のある人たちの表現活動の現場に関わってきた中で、障害のある人の表現には、もっと大事な価値、深い意味があるのではないかと考えてきました。

例えば、これは高橋創さんのドローイングです。ぐるぐると、チビたクレヨンで何日もかけて1枚を描き、もう20年近く毎日続けている。その歳月で、最初の意味とは別の意味が表れてきます。これは、その表現と本人を尊重する支援者がいなければ、ここまで深いものにはなりません。

しかし、一見落書きのようなscribble系の作品は多く、展覧会のコンペではまず入選しない。残念ながら20年の厚みや深みは、パッと見ただけではわかりません。もう少し作品とじっくり向き合った時に、見えてくる世界。でも、そこに大きな意味がある。その価値を伝えることが、大事だと思ってきました。

行為の痕跡「生きるための表現」

これは杉浦篤さんが、ずっと大事にしている写真です。主にお父さんとの旅行の写真で、入所施設の部屋でずっと触り続け、擦れたりしてこの状態になった。彼の大事なものだからと職員さんが捨てずに保管していたものです。100枚近く、この状態のものがあります。それを見せてくれた時、すごく心動かされるものがあり、工房集ギャラリーで作品として展示し、画集もつくりました。それが、埼玉県立近代美術館の学芸員の前山裕司さんの目にも留まり、「すごいぞ、これは！」展に取り上げられたりしています。

もともと表現しようとして作られた作品ではなく、彼が生きる中で、お父さんとの思い出を確認したり大切にしたりしていることが、写真を介して表れ生まれた作品です。そこには、人間にとってとても切実な行為、「生きるための表現」が、形になって残っている。それを見た時、アートの概念が崩れる思いでした。世間がどう評価するかわからない。でも、作品としたのは、自分の心が動いたから。そして、その感動のリレーによって、彼の作品がアートになった。そこが、とても大切なことだと思っています。

とかく問題行動とみなされ、やめさせることを考えがちですが、障害や行為による痕跡の中にも、心が動かされるものがある。「表現」として見た時、それは、彼らの切実な行為だと気づく。それを尊重して、「作品」とした時、それが多くの人の心を動かす「アート」になると考えています。

福祉の視点がもたらすもの

「埼玉県障害者アート企画展」では先進的な試みとして、そういった美術のカテゴリーに収まりきらない作品が、たくさん展示されてきました。「もしかしたらアートかもしれない」といった、一般的な美術より少し広い視点で議論を重ね、展覧会をつくってきました。

施設で作品を選定する際も、美術的な視点だけでなく福祉的な視点から「それが彼らにとってどれだけ必要なものなのか」、視野を広げて表現と向き合い、感じて、判断する。それにより、福祉的な視点が入った展覧会になる。それが、社会に新たな価値をもたらす。そこが、美術的な視点や評価だ

けでは得られない、とても大切なことだと思っています。

これは、福島尚さんの作品です。一見、鉄道写真の様ですが、記憶だけで描いています。遠近法も確かで、でも、全部に焦点が合っていたり、部分的に省略されていたり、彼のこだわりや障害特性が作品に反映されています。

彼の作品は、画集にもなっていますが、こういった一般的な美術の分野でも高く評価されている作品と、アートかどうかわからない行為性の作品とが、埼玉では共存して一つの空間に展示され、展覧会をつくり上げているところが豊か。それが、障害のある人の表現の幅と深さだと思います。

施設職員の意見が発信力になる

過去の埼玉県障害者アート企画展のアートマネージメント研修（ワークショップ）では、僕が先導するというより、参加した施設職員の意見を吸い上げ、まとめながら展覧会をつくり上げてきました。そうしないと、面白くならない。展覧会のタイトルもみんなで考えました。「利用者の表現には〝どうしちゃったの、これ〟というものがあるよね」といった会話から、肯定的な意味になるよう「うふっ」を付けて「うふっ♡どうしちゃったの、これ!?」に。翌年は、そのアンサーの意味で「えへっ。こうしちゃったよ、これ!!」にと、利用者と職員との関係性が表れました。みなさんの日常の視点を反映してこそ、新しい波を起こすユニークな展覧会になる。実際、アート関係の人たちが見に来て、世に出ていった作品もありますが、その発信力は、福祉の現場の意見を取り入れ、生まれたものだと思います。

多様性豊かな表現を生む埼玉方式

また、埼玉が素晴らしいのは、県の「表現活動状況調査」が、企画展の出展作品を決める選考に絡んでいるところ。作品かどうかわからない表現も含めて集め、さらに、美術的福祉的視点を交えてみんなで議論して選考する。そこが埼玉の強みです。その積み重ねがあるから、自信を持って世に問える。そして、20以上の施設がTAMAP±0として協力して、展覧会に取り組んでいるというのも、全国的には珍しく、大きな強みです。

今、全国各地で障害者アートの展覧会や作品選考会が開かれていますが、大抵は、美術の専門家による評価です。福祉の視点が評価に反映され、美術専門家と意見を交わし、これだけ多くの施設職員が協力して運営している地域は、まずありません。広く現場の声を吸い上げて取り組んでいるからこそ、作品数も多く、表現の多様性も豊かで、その広がりや深さ、切実さが、クリアに見えてくる。そこが、埼玉は素晴らしく、また、大切なところです。他県では、これを「埼玉方式」として、見習おうとする動きもあります。

「もう一つの言語」としての表現

障害のある人、特に重度の人たちは、言葉が不自由な人が多く、たぶん僕らより自由も少ない。食事も旅行も一人ではできず、不自由な生活を強いられている。その彼らにとって、絵を描いたりする表現には、どんな意味があるのだろう。自由に振る舞えるのは、絵を描いたり、物を作ったりすることだけかもしれない。その表現とは、彼らにとって「もう一つの言語」ではないのか、と考えています。

一見、同じ殴り書きのようなscribbleの作品でも、一人ひとりの個性やその日の状態などが反映されています。類型的と見るのではなく、一つひとつの表現を読み込んでいくと、一人ひとり、異なる何かを伝えている。共に暮らしている施設職員は、もっと具体的にそれが、読み取れるのではないでしょうか。

その視点を展覧会に取り込むと、様々な不自由さを抱えている彼らの表現の、切実さも感覚の豊かさもほかの何かも、彼らの全体像が、アートとなって伝わる展覧会になっていくと思っています。

みんなで新たな価値を創る

彼らの表現活動には、いろんな可能性がある。人間とは何か、障害とは何か、そして、社会はどう変わらないといけないか。いろいろな「問い」がある。だから美術や福祉だけでなく教育など、様々な分野の人がコミットして、埼玉のこの活動のつながりも生まれています。

美術的に評価の高い作品だけを集めるのではなく、社会を一緒に生きる仲間として、みんなで新たな価値を創っていく。そこが、「埼玉県障害者アート企画展」の大きなミッションだと思っています。

そして、展覧会だけでなく、アート活動により障害のある人たち一人ひとりの自己肯定感が育まれること、それを共有できる場を設けることも、とても大切です。

福祉の現場は、僕らの暮らしに直結する様々な課題が集まる結節点。そこで起こることは、どれも社会にとって大事なこと。また、そこは、人間の本質的な課題や様々な感情が重層する豊かな場でもある。それらを発信することで、何かが変わる。

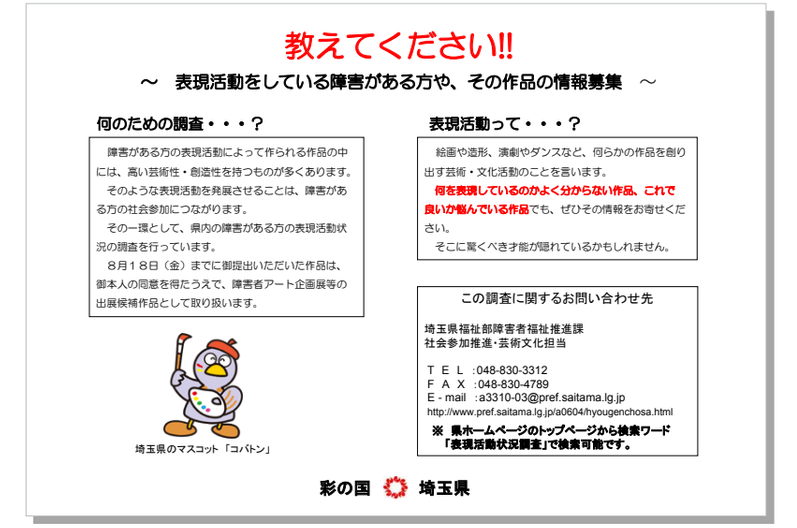
そんな視点を持って、豊かな広がりのある展覧会をみなさんとつくり上げることができたらと思っています。

現場で感じたことをどんどん投げかけ、主体的に関わりながら、展覧会をつくる。意見がぶつかっても、最終的に「みんなでつくった展覧会」になれば、有意義な活動になると思っています。

表現活動状況調査

「これってアート？」も発掘！

毎年、多彩な新たな表現を発掘し
障害者アート企画展の発信へダイレクトにつなぐ
埼玉県独自の「障害者芸術・文化活動」支援の取り組み



教えてください!!

～ 表現活動をしている障害がある方や、その作品の情報募集 ～

何のための調査・・・？

障害がある方の表現活動によって作られる作品の中には、高い芸術性・創造性を持つものが多くあります。
そのような表現活動を発展させることは、障害がある方の社会参加につながります。
その一環として、県内の障害がある方の表現活動状況の調査を行っています。
８月１８日（金）までに御提出いただいた作品は、御本人の同意を得たうえで、障害者アート企画展等の出展候補作品として取り扱います。

表現活動って・・・？

絵画や造形、演劇やダンスなど、何らかの作品を創り出す芸術・文化活動のことを言います。
何を表現しているのかよく分からない作品、これで良いか悩んでいる作品でも、ぜひその情報をお寄せください。
そこに驚くべき才能が隠れているかもしれません。

埼玉県のマスコット「コバトン」

この調査に関するお問い合わせ先

埼玉県福祉部障害者福祉推進課
社会参加推進・芸術文化担当

ＴＥＬ :048-830-3312
ＦＡＸ :048-830-4789
E-mail :a3310-03@pref.saitama.lg.jp
http://www.pref.saitama.lg.jp/a0604/hyougenchosa.html

※ 県ホームページのトップページから検索ワード「表現活動状況調査」で検索可能です。

彩の国 埼玉県

埼玉県では、２００９年から県内の「障害者の芸術・文化活動」状況を把握するために「埼玉県表現活動状況調査」を行っています。「埼玉県障害者アート企画展」では、この調査で提出された調査票（作品画像）をもとに選考を行い、毎年、新たな表現を発掘。多彩で瑞々しい作品をダイレクトに社会へ発信して「障害者の芸術・文化活動」の支援・普及に努めています。

今年度からは、アートセンター集が県と連携して、選考や調査に伴う作品画像の整理や分析などを行いました。

［調査票のポイント］

「これって作品？」と悩む表現も大歓迎！

作品なのかわからない、まだ評価されていない、施設側や家族が悩んでいる作品も含めて回答を求めています。

［目的］

多様な表現の発掘！

表現は本来自由なもの。アートの捉え方も流動的。芸術の枠を定めない、価値を押し付けないことを大事にしています。

［ 調査の流れ ］

- 6月頃:埼玉県から福祉施設や特別支援学校、個人へ調査票を郵送。県のホームページでも発信。
- 8月頃:締日提出分のみ取りまとめ9月の作品選考会へ。選考後、美術専門家が詳しい情報（他の作品・作品数・創作の背景等）が必要と判断した作品・作家についてはさらに個別に調査を進める。
- 調査は年間を通して実施。

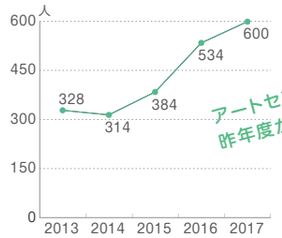
（詳細:埼玉県福祉部障害者福祉推進課HP　http://www.pref.saitama.lg.jp/a0604/hyougenchosa.html）

［ 調査内容 ］

- 氏名（アーティストネーム）・表現活動の種類・提出回数・障害区分・連絡先・施設名等
- 作品画像の提出1～2枚
  題名・作品サイズ・素材・新作か旧作か・既出か未提出か・備考（作品背景・連作の有無等）

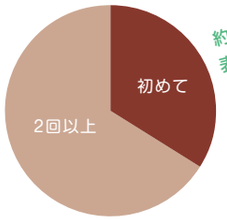
2017年度 埼玉県「障害がある方の表現活動状況調査」結果

過去5年間の調査回答数推移

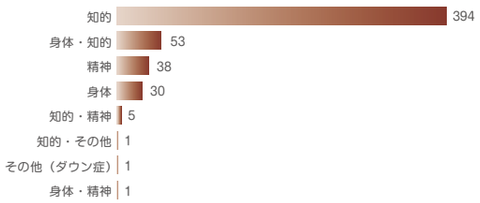


今年度
回答約600通
過去最多

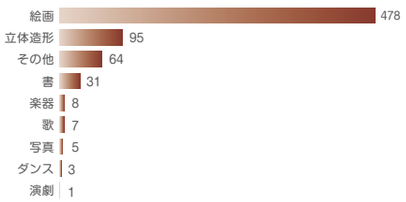
提出回数



障害区分



表現活動の種類



市町村別回答数

市町村	人数
川口市	111
上尾市	74
さいたま市	71
新座市	58
蓮田市	34
東松山市	28
熊谷市	25
戸田市	23
川越市	17
久喜市	16
三郷市	14
入間郡毛呂山町	14
比企郡川島町	12
入間市	11
南埼玉郡宮代町	10
深谷市	10
秩父市	9
春日部市	9
桶川市	9
鴻巣市	8
比企郡嵐山町	7
大里郡寄居町	6
所沢市	5
児玉郡神川町	4
比企郡滑川町	3
児玉郡美里町	3
入間郡越生町	3
鶴ヶ島市	1
行田市	1
富士見市	1
日高市	1
飯能市	1
草加市	1
北本市	1

以上63市町村中34市町
他29市町村は回答数0

作品選考会

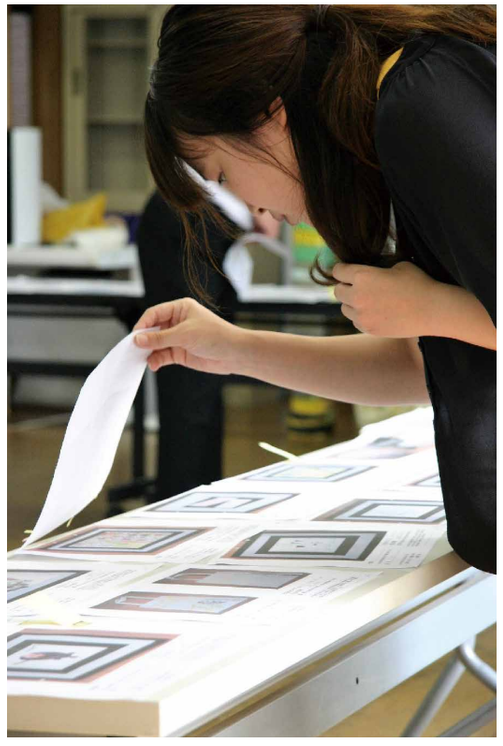
福祉・美術…多様な視点が交錯する

埼玉独自の「投票&ディスカッション」選考

県の「表現活動状況調査」で提出された調査票（作品画像）をもとに行う、「埼玉県障害者アート企画展」の「作品選考会」では、美術の専門家と福祉施設職員のＴＡＭＡＰ±〇メンバーが、共に表現について語り合いながら選考を行っています。

単にそれぞれが作品を選ぶだけでなく、みんなでディスカッションする時間を設けて、専門家のアート的な視点（見方・価値観）と、作品が生まれる現場の福祉的な視点を交錯。それにより、専門家・施設職員双方に「気づき」が生まれ、表現の魅力や可能性を探求することにつながっています。特に、行為から生まれた表現について「その魅力は何か」「どんな背景があるのか」、多様な視点を交えて考えることが、「なぜ表現するのか」「アートとは何か」と深く本質を掘り下げることにつながっています。そして、その議論の中から、共に心動かされるアートの可能性を秘めた表現が発掘されています。

今年度は、総勢47名の選考委員で約６００の調査票から最終的に97名の出展作家を選出しました。



STEP 1 投票

まずは、自分の目で選ぶ

自分がいいと思った（心が動いた）作品

作品をどう見るか、どう選ぶかは、選考委員それぞれに委ねられています。今回は視点の目安として、作品選考のキーワード（アート的、福祉的、情動的）の提供を試みました。

作品選考のキーワード

【アート的】色、形、レイアウト、発想、コンセプト、造形的、デザイン的、構図、構成、線の魅力、類型がない、新鮮…

【福祉的】関わり、背景、障害による表現の違い…

【情動的】心が動かされる、あったかい、かわいい、元気が出る、感動する、涙がでる…

作品選考の流れ

①各自持ち票分の作品を選んで付箋を貼る。

▼

②得票数ごとに分類し多数票の作品を決定。

▼

③決定していない得票数上位の作品の中で推したい作品などをディスカッション。

▼

④選考委員の意見と得票数を踏まえて最終的にはキュレーターの中津川浩章さんがコンセプトや展示プランに合わせ出展作品を調整。

STEP 2 ディスカッション

さまざまな視点を交えて語り合う

投票により決まらなかった作品についてディスカッション。自分の推したい作品について「どこが魅力か」「どうして薦めるのか」「どう評価しているか」などを語りました。

福祉施設の職員からは、担当する作者の表現について、創作の様子や表現が生まれた背景、本人にとってどんな意味があるのか、障害やこだわりがどう反映されているのか、作者の人となりなどについても語られます。

その福祉的な視点が、作品をより深く読み取ること、表現やアートについて深く考えることへ誘い、作品の魅力がさらに見えてきたり、議論や選考が深まったりしています。

【選考委員】47名

- TAMAP±〇メンバー　38名
- 岩本憲武　弁護士／モッキンバード法律事務所
- 大島健治　埼玉県福祉部障害者福祉推進課主幹
- 大畠宗宏　一般社団法人埼玉県セルプセンター協議会副会長
- 小澤基弘　埼玉大学教育学部教授（絵画及び美術教育）、画家
- 酒井道久　彫刻家、埼玉県立大学名誉教授
- 中津川浩章　美術家、アートディレクター
- 根岸章王　埼玉県福祉部障害者福祉推進課課長
- 前山裕司　埼玉県立近代美術館学芸員
- 山路久彦　（社福）みぬま福祉会総合施設長　埼玉県発達障害福祉協会相談支援部部長

例えば今回は、施設職員の関大友さんと協力委員で美術教育学教授の小澤基弘さんのこんな発言が一つの課題提起になりました。

「これは、去年入所したばかりの方の（アートかどうか悩んだ）作品です。新聞紙に小さな穴がいくつも開けられています。たまたま彼が目の前にあった新聞紙に、指にツバをつけて開けたものですが、その穴をよく見てみると、「国」など四角い文字だけが開けられていたんです。…」

「新聞の穴のことは聞かないとわからなかった。実物が見たいと思いました。（実物を見て）これをどう見るか――。今回行為性の作品が多かったが、私はアートは何か美的なものがないといけないと思っています。行為性と美が結びつかないと単なる痕跡になってしまう。そこを見極めることが大事。何か物語や意味があるから選ぶというのは違うと思う。そのことを考えるいい機会になった。勉強になりました。」

TAMAP±〇メンバーの感想

議事録・アンケートより一部抜粋編集

- 担当する利用者の票に一喜一憂し、一緒に夢を見ているような気持ちになった。
- 福祉の現場の人間はどうしても思い入れが強くなるので、美術の専門家の方に見ていただけることがありがたいと思った。
- 客観的な要素が加わり、選びやすくなるように思った。
- 今年は「こういったのが好き」「もっとみたい」など、これまでと違う視点で見られるようになっている自分に気づきうれしい。
- これに票が入るのかと考えさせられた。
- 行為で生まれたものの中にも美が必要だと聞いて指針にしていきたいと思った。
- 入選しないと怒ってしまう利用者がいるが、これだけの数から選ばれることは大変なこと。名誉なことだと伝えたい。
- 選ばれなかった作品にもいろんなヒントがあると思った。
- 施設内で「これはだめだろう」といわれた作品も、調査票を出してみんなにチャンスを与えたいと思った。
- 自分の施設の障害の重い方からも、もっと作品が生まれているに違いないと思った。

表現の発信

4つの展覧会と作家イベント

主催：埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇、社会福祉法人みぬま福祉会
共催：埼玉県
後援：上尾市、春日部市、川口市、川越市、川島町、行田市、久喜市、熊谷市、鴻巣市、さいたま市、所沢市、戸田市、新座市、東松山市、三郷市、吉川市、嵐山町、JR東日本大宮支社
協力：埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会、con*tio、chipmunk、pocken、埼玉県立近代美術館、アートギャラリー呼友館
助成：障害者芸術文化活動普及支援事業（厚生労働省補助事業）

今年度も「埼玉県障害者アート企画展」を中心に3つの作品展と1つのグッズ展を開催。4つの展覧会を連動させることで、単に作品を集め選び展示するのではなく、一人ひとりの表現の魅力や可能性、埼玉全体の表現活動の層の厚さを、多角的に発信しました。

昨年度に続き県内各地で開催。タイトルに連動性を持たせながらも、県立の美術館、事業所内のカフェやギャラリー、懐石料理店のギャラリーという異なる空間で、それぞれ特色ある展覧会になりました。

今年度初の試みとしては、企画展で「来場者投票」を実施。上位10名の作品を次の展覧会で取り上げ、一人ひとりの表現の奥行きや幅広さを伝えました。

また、恒例の作家イベントのほか、出展作家が参加するオープニングセレモニーも開催。展覧会が様々な人と交流しながら自ら魅力を発信する表現の場にもなっています。

1 @春日部市 喫茶ゆめいろ

県東部のみんなが働くカフェからキックオフ！

「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」

2017年8月22日（火）～9月2日（土）
多機能型事業所わっくす喫茶ゆめいろ
キュレーション：中津川浩章
出展作家22名／出展作品約110点

テーマ
新たに発掘された「変だけど面白い」作品、思わず笑ってしまうような作品、とってもキュートでカワイイ作品、奇妙なポップさがある作品など、新鮮な驚きとその多様性を見せる展覧会。

作家イベント
【アーティストトーク】作家4名

関連イベント
たけさと
ゆめいろ祭り

カフェ
喫茶ゆめいろ

2 @川口市 工房集ギャラリー

織もみせます ライブもします 野菜も売ります グッズ展！

「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」織り＆グッズ展 ツグズムズ10

11月1日（水）～12日（日）
工房集ギャラリー
キュレーション：con*tio
出展作家181名

テーマ
アートグッズ（商品）をメインにした展覧会。何のための商品化なのかを意識化し、自分たちのグッズの開発やクオリティの向上を目指す「グッズ研修会」の集大成としての展覧会。

作家イベント
【ライブパフォーマンス】作家5名
【ステンドグラスワークショップ】作家2名

関連イベント
おれんじさんの
新鮮野菜販売
アトリエ見学ツアー

カフェ
集カフェ

3 @さいたま市 埼玉県立近代美術館

今年で8回目 全372作品 可能性を秘めた 表現がズラリ！

第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」

12月6日（水）～10日（日）
埼玉県立近代美術館 一般展示室1
キュレーション：中津川浩章
出展作家97名／出展作品372点

テーマ
埼玉県内の障害のあるアーティストによる作品展。埼玉県のアーティストの数、層の厚さ、作品のクオリティを一堂に見せる。県の表現活動状況調査をもとに、作品選考会を行い、TAMAP±〇と協力委員、県職員が協働で展覧会を開催する。

作家イベント
【オープニングセレモニー】
作家10名

関連イベント
来場者投票
シンポジウム
ダンス公演

4 @川越市 アートギャラリー呼友館

来場者が選んだ 作家10名と 北西部の多彩な 作品が大集結！

「うふっ♥埼玉でまたまたこんなのみつけちゃった♪」

2018年2月7日（水）～12日（月・祝）
アートギャラリー呼友館（いも膳内）
キュレーション：中津川浩章
出展作家37名／出展作品160点

テーマ
12月の企画展から連動する展覧会。アーティストの数、層の厚さ、作品のクオリティを県北西部に広める。企画展で行った来場者投票上位10名の作品をより深く楽しめるように紹介。

作家イベント
【アーティストトーク】作家10名

1 「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」@春日部市

来場者数 459人

昨年も好評だった多機能型事業所わっくす「喫茶ゆめいろ」が会場。〝ちょっと変だけど面白い〟をコンセプトに10団体22名の作品を紹介しました。

この展覧会は、12月の企画展に向けてのキックオフ展。コンセプトは、県東部担当者の提案をもとにTAMAP±〇定例会で話し合い決めました。また、出展作品の選考は、各施設がコンセプトに合った作品を持ち寄り定例会でプレゼン。キュレーターの中津川浩章さんを中心に、みんなで表現や作家の魅力を語り合いながら選びました。

会期中、会場では、ほぼ通常通りカフェとしても営業。ランチに来たお客さんが作品に関心を持ってくれたり、展覧会をきっかけにカフェを知ったりと、カフェならではのつながりや広がりがたくさん生まれました。

また、新聞に記事が掲載されたことで、近隣地域から足を運んでくれたり、カフェのお客さんが久しぶりに来店してくれたりと、思わぬ出会いもありました。

会場では、月1回ボランティアで来ている演奏家の協力により2回、ピアノ演奏会も開催。地域の人たちに、障害のある人の表現を気軽に楽しんでもらえる機会が増え、事業所のお祭りと重なった最終日は大いに盛り上がりました。

恒例のアーティストトークには4名が参加。2名は初参加で少し緊張気味でしたが、質問に一所懸命答える姿や、家族が話す自分の紹介を誇らしげに聞く表情からも、それぞれの表現活動に対する思いが伝わってきました。

〔出展作家〕新井貴道　石井陸渡　岩井美和子　小林春介　小林ちゃん　斉藤淳太　利根川美代子　中沢潤　島村利一　田村智宥　齋藤進　苗村安夫　長島文也　原田文　平川寛隆　マスカラ・コントラ・マスカラ　松岡理樹　宮原裕美　森川友博　安田英明　ヤマダジュンヤ　横田和明

至る所に作品が展示された会場は、カフェも通常営業。初めての方にも障害のある人の表現活動を知っていただく機会になった。

TOPICS カフェから日常へ

ワンコインでシェフこだわりのカレーやランチが食べられる喫茶ゆめいろ。その味とあたたかな空間にファンも多く、地域のカフェとして根付いています。

カフェでは常時、事業所のメンバー10名が交代で働いています。今回、そのうち4名の作品も展示されました。

カフェでの開催は、昨年度に続き2回目。食事に来た常連さんからは、「今回はおとなしめな作品展なのね」との感想も。何気なく足を運んだカフェで作品に触れ、それが印象に残り、また関心を持ってみてくれている。地域の人たちの日常に、障害のある人の表現が、少しずつ溶け込んでいることが感じられるうれしい一言でした。

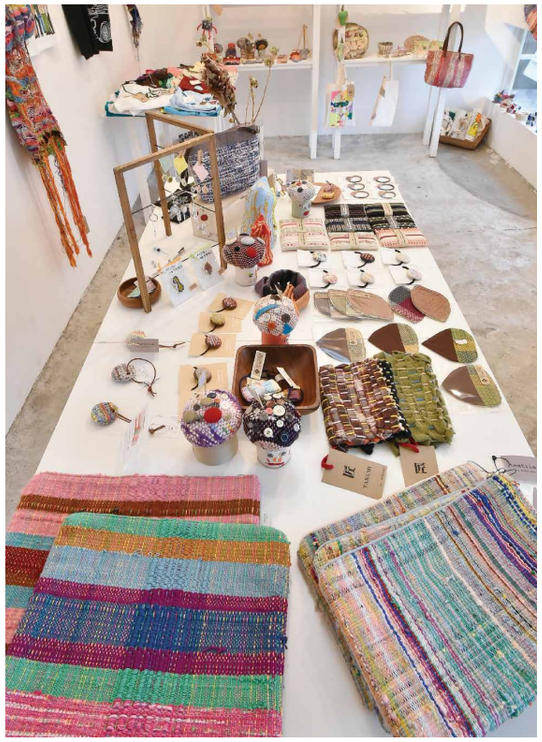
また、以前出展作家を担当していた教員が、偶然立ち寄り、作家と再会して教え子の展示作品を見て驚きながら、その成長を共に喜び合うなど、地域と共に歩んでいる事業所ならではの出会いや出来事がたくさんありました。

2

来場者数 782人

「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」織り&グッズ展 ツグズムズ10

@川口市



表現や作家の魅力を商品として発信することで、新たな広がりやつながりが生まれます。織り&グッズ展は、それを実体験する場でもあり、「グッズ研修会」の一環として開催しています。

全9回の研修会には、昨年度より2団体多い17団体が参加。単に売れる商品を作るのではなく、「何のための、誰のための商品化なのか」を、コーディネーターであるcon*tioの杉千種さん、山口里佳さんを交えて考え、意見交換しながら各施設の課題に合わせた商品開発・改良を行いました。

そして展覧会には、個性豊かなグッズがずらり！　特に今年度は、施設間コラボにより各施設の強み、技術や魅力を融合した質の高い商品がたくさん誕生しました。

また、初の試みとして、織りを施設の中心の仕事と位置付けている「織の音工房」と、「工房集」の織物を一緒に展示。作品には各施設の特長が表れ、配色や風合いに自然と人柄が表れる織りならではの味わいや奥深さを、わかりやすく伝えることができました。

グッズ展の来場者は30代が多く、50～60代が多い作品展と比べ、若い世代が障害のある人の商品に関心を持っていることが、アンケートを通して見えてきました。

【参加団体】NPO法人C-Lひこうせん、NPO法人ゆめたまご、（社福）昴&デイセンターウィズ、（社福）皆の郷川越いもの子作業所、（社福）新座市障害者を守る会、（社福）皆成会、（医）双里会、NPO法人なまずの里、（社福）川の郷福祉会、（社福）啓和会、（社福）戸田わかくさ会、（社福）ワーク&ライクのびっこ、（社福）埼玉県社会福祉事業団あげお、NPO法人織の音アート・福祉協会、（社福）めだかすとりぃむ、（公社）やどかりの里すてあーず、（社福）みぬま福祉会

たくさんのつながりを経て完成した商品の数々。
その見せ方を学ぶ大切な場にもなった。

TOPICS

おれんじさんの新鮮野菜販売

地域の人に喜ばれ、つながりも生まれる野菜の訪問販売。川の郷福祉会おれんじでは、メンバーたちが「大好きな仕事」として100軒を超える家庭に新鮮野菜を届けています。

この5年以上続く販売を「パフォーマンスにできないか」との話がグッズ研修会で持ち上がり、試みることに。施設ではメンバーの描いた絵をあしらった手作りエプロンとメンバーの手描きポップを準備して、会期中の日曜日に出張販売開始。「いらっしゃいませ」と声をかけ、お客さんからは「そのエプロン、売ってないの？」との声も。メンバーの元気が販売の一つのウリとなり、参加メンバーにとっても特別な経験になったようです。

3

来場者数 1,965人

第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」

@さいたま市

第8回を迎えた今年度は、97名の372作品を紹介しました。

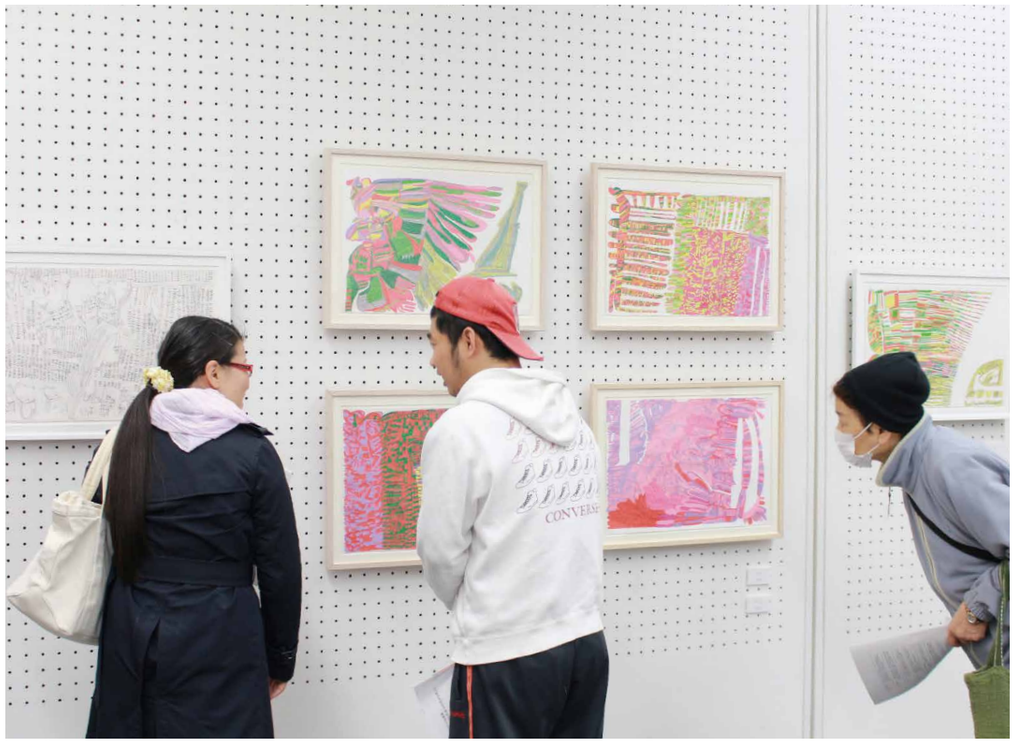
障害のある人の「表現の発掘」を目的に行う県の表現活動状況調査には、過去最多の600以上の回答があり、その調査票（作品画像）をもとに作品選考会を行いました。今年度は、協力委員の美術専門家4名とTAMAP±〇の福祉施設職員のほか、協力委員の弁護士や県の職員も参加。総勢47名で「投票＋ディスカッション」方式により、「福祉×美術」など多様な感性・視点・評価を交えて出展作家を選出しました。さらに、美術専門家4名の気になった作家については、創作状況を調べて協議し、最終的にはキュレーターの中津川浩章さんに判断を委ね、出展作品が決まりました。

選ばれた97名の作品は、外部の評価も高い力のある作家の作品から「これはアート？」と議論を呼ぶ作品まで今年度も実に幅広く、表現の多様性や可能性を発信する力強い展覧会になりました。

この県内の表現を発掘し、一人ひとりの表現の魅力を伝えながら、その幅広い作品を通して「アートとは、表現とは、障害とは…」と社会に問うことが、他にはない「埼玉県障害者アート企画展」の特長になっています。

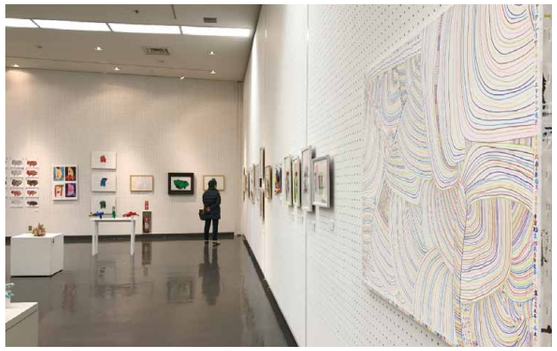
オープニングセレモニー

今回、初めてオープニングセレモニーを開き、出展作家10名がテープカットに参加。主催者や行政関係者と並んで来場者に挨拶をし、報道陣の取材にも応じて創作の想いや出展の喜び、今後の目標などを語っていました。来場者に自ら作品の説明をする姿も多く、テープカットのリボンを記念に持ち帰る人も。それぞれが展覧会という場を実感する特別な機会になったようです。



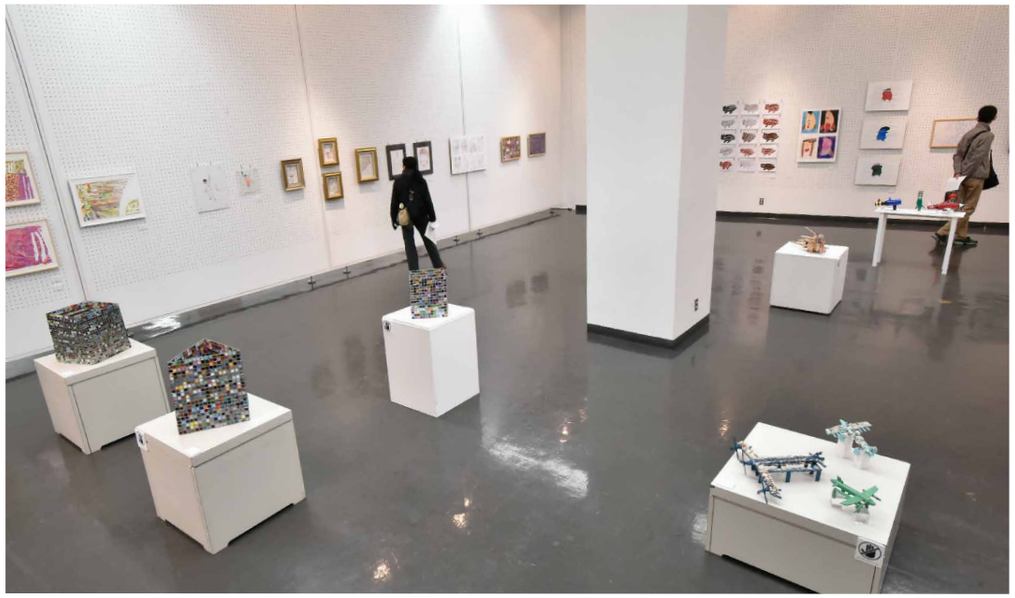
それぞれの深まり広がり

展覧会実践の継続により、作者をはじめ家族や施設職員、施設の仲間や来場者にも、展覧会がさまざまな成長や変化をもたらしていることが見えてきました。詳細は→P40



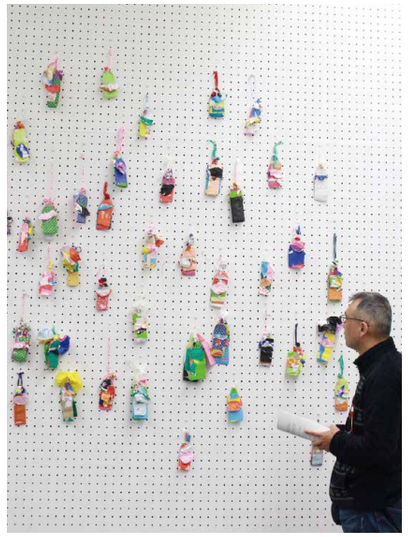
作品集

開催後、昨年度に続き出展作品の写真と解説を収録した「作品集」が発行されました。
発行:埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会



来場者投票

展覧会タイトル「こんなのみつけちゃった♪」を体感してもらうための初企画。総投票数はなんと、1839票！思わぬ成果がいろいろありました。詳細は→P37



［出展作家］平川寛隆　斉藤淳太　高橋香　なお丸　福島尚　相田大希　ユキウサギ　小幡海知生
川田修　小林ちゃん　夘月寛　小原隆　すずきしょうた　大森利浩　堀口孝一　TAKA　金谷ゆり
並木信弘　前田聡男　渡邉あや　安田拓海　西野克　戸田裕人　白田直紀　横山涼　田村智宥
林直登　岩井美和子　本間充広　佐々木省伍　高橋創　高野穂　土屋莉恵　岩瀬賢美　荻原徹
中沢潤　浜林主基　鳥羽直弥　椎橋豊　寺山貴広　織風　阿部香織　髙野博史　千葉治暉　杉本
健太　木津裕貴　三俣ヒロ子　山口敏夫　拓真　Maya　田中信之　豊満紀彦　高橋裕介　赤星
大輔　横田和明　高橋裕子　内藤みひ　大橋まり子　鈴木めぐみ　新堀尚子　齋藤進　ヤマダジュ
ンヤ　髙橋恵子　横井雅美　村上弘樹　小林大河　長谷川真二　宮原裕美　藤崎香織　藤井隆亨
三好進　青木悟　清水聡　佐藤みや子　千葉創三郎　新井貴道　橋本佳奈　尾ケ井保秋　中崎強
髙橋典光　野村真優子　SY　大畑桂子　田中俊人　下浅靖之　島田素美子　鎌田健勇　石井章
河野大輔　大倉健　大澤慧　コバヤシカオル　森川里緒奈　マスカラ・コントラ・マスカラ　原口めぐみ
高橋奈美　杉浦篤

4

来場者数 413人

「うふっ♥埼玉でまたまたこんなのみつけちゃった♪」

@川越市

今年度最後の展覧会は、川越の懐石料理店「いも膳」併設の「呼友館」にて開催しました。古い蔵造りの建物を改築した趣きあるアートギャラリーです。

2階には、12月の企画展で行った来場者投票の上位10名の作品を展示。これぞという作品に絞った作家もいれば、作風の異なる作品を並べて創作の幅を見せる作家もあり、それぞれの個性が際立つパワフルな展示空間になりました。また、1階には、地元県北西部の作家を中心に27名の作品をピックアップ。企画展をさらに深めた多彩な作品を紹介しました。

来場者投票上位10名には、企画展にほぼ毎回出展され年々ファンを増やし自ら活躍の場を広げている常連作家だけでなく、初めて調査票を提出し展示されて選ばれた作家もいました。また、この展覧会に向けて制作した新作を出展してくれた作家や、毎日在廊して来場者に制作の様子を披露してくれた作家もあり、企画展から続けて見に来てくれた人たちを楽しませてくれました。

最終日のアーティストトークには10名が参加。本人だけでなく、作家の家族や職員も、制作の様子やその想いを熱く語ってくれました。

「いも膳」のついでに立ち寄られたお客さまからも、帰りに驚きや感動の声がたくさん寄せられました。

［出展作家］なお丸　宮原裕美　渡邉あや　相田大希　高野博史　福島尚　高橋香　白田直紀
小幡海知生　小林ちゃん　ユキウサギ　コバヤシカオル　石井章　齋藤進　横井雅美　横田和明
前田聡男　三好進　原口めぐみ　藤崎香織　野村真優子　ヤマダジュンヤ　尾ケ井保秋　中崎強
卯月寛　すずきしょうた　青木悟　森川里緒奈　高橋典光　浜林主基　平川寛隆　椎橋豊　髙野穂
大森利浩　並木信弘　林直登　杉浦篤

アーティストトークは本人だけでなく体験した
全員にとって成長の場。

会場の違いや、同じ空間での
形の異なる作品の展示など、
回を重ねる毎に学びを実践し
てきた。

TOPICS

来場者投票による気づき

「こんなのみつけちゃった♪」を体験してもらおうと試みた初企画。12月の企画展で来場者に投票用紙を配り、気に入った作家3名を記入してもらう方法で行いました。投票数は延べ1，839票！　結果は同月ホームページで公開しました。

1位2位は100票を超える人気。3～35位は20票以上、63位までは10票を超える僅差。さらに0票は一人もいませんでした。また、「これはアート？」という作品でも10票以上の票を得た作家もあり、その行為の痕跡に人の心を動かす何かがあることを改めて気づかされました。

会場では、「どれも素晴らしく絞れません！」といった感想が多く、作品をじっくり鑑賞してもらえていることを実感。来場者には、なぜその作品が気になったのか、考えてもらうきっかけになり、選ばれた作家には、自分の作品を気に入ってくれた人がどれだけいるのか具体的に伝わり、大きな励みになったようです。

第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」関連企画

来場者投票上位10名 作家紹介

1 なお丸

119票

僕の作品作りの年間計画は、企画展に何を出品しようかと考えることから始まります。大型の作品を作ろうか？左右に突き出た迫力ある作品を作ろうか？可愛い動物をたくさん作ろうか？楽しく毎年考えて挑戦しています。作品が埼玉県立近代美術館に並ぶ達成感は最高です。そして、みなさんに僕の世界を観てもらえましたら超最高です。

2 宮原裕美

104票

細やかな模様の組み合わせで構成された作品を描く宮原さん。コロコロと雰囲気が変わっていく作品と同じように、異次元で不思議な物のようでもあり、ユニークでポップなものでもあり、繊細で大胆で明るく楽しい魅力的な作家です。

4 相田大希

61票

支援学校の中学部3年の時から描く事を始め今日に至っています。2002年から二科展やその他の公募展で多数受賞しています。海外で展示された絵もあります。15年間に描いた絵はたくさんありますが、どの絵もその時の大希にしか描くことのできない絵です。

3 渡邉あや

69票

あやさんと言えば、「飛行機」。でも、自分の表現を見つけるまで、さまよい、悩み、模索し続けてきた。養護学校の修学旅行で行った沖縄。「また飛行機に乗って、沖縄に行きたい」という思いから見つけた飛行機というモチーフ。心の深いところにある寂しさや満たされなさは多くの人に認めてもらいたい、関わりたいあやさんの切実な願い。

6 福島 尚

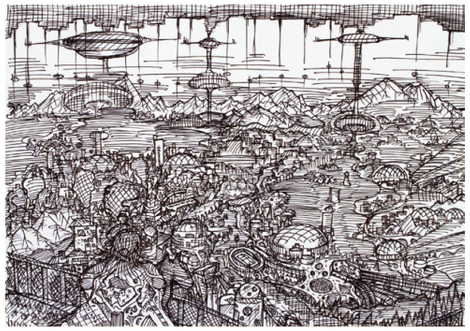
56票

幼少期から鉄道に強い興味を持ち、列車や信号機、踏切り等鉄道に関する絵を描くようになった。アクリル画や水彩画の他、ペーパークラフトや乗車券のレプリカを作る等、創作範囲を広げている。

4 髙野博史

61票

退院をしてからの約8年間リハビリも兼ねて毎日絵を描くようになりました。日々すてあーずという作業所で革製品を製作。自分なりのデザインに悪戦苦闘しています。そこでの作業の影響もあるのか、年々より細やかな描写の作品に変化してきました。



7 白田直紀

54票

画像を見ながら描くが、決してそのものではない。細かいペン先を何回も往復させ、独特な色彩を出す。今はとにかく花を好んで描いている。愛らしくもあり、それでいて不気味さもある彼の世界がある。

7 髙橋 香

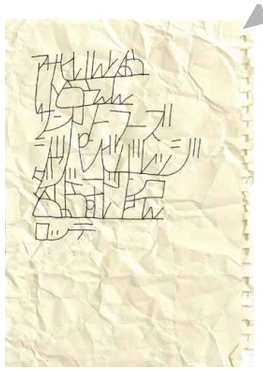
54票

感情を整理するために描く事が多いです。100色以上の色鉛筆と10B～10Hの鉛筆を使って描いています。何回も重ねて描くので、仕上がるまで時間はかかりますが、その間に気持ちが整理されていきます。

10 小林ちゃん

34票

どっしりと椅子に腰かけテーブルに伏せるように、今日も文字や絵を想うがままに綴っています。そして、ゴミ箱にポイッ。しわしわのメモ帳を広げたら、小林ちゃんワールドが、どーんと飛び出してきました。



9 小幡海知生

50票

上野博物館に深海魚を見に行き、そこから今回の魚の表現になりました。紙を15枚自分で貼り合わせて、大きな作品に仕上がりました。

展覧会の継続によりみえてきた 作家・施設職員・家族・施設の仲間・来場者・地域の人たち

それぞれの深まり広がり

展覧会は、「作品を発表したい」「仕事にしたい」と創作に励んでいる障害のある人たちの大きな目標になっています。また、出展作家に自信や意欲をもたらすだけでなく、施設職員や家族、同じ施設の利用者へも変化や成長をもたらしています。

みんなで展覧会をつくることがゴールではなく、鑑賞する（みんなで作品を見に行く取り組み）、振り返る（感想を語り合う）までの一連の流れを大切にすることを継続してきたことで、作家・施設職員・家族・施設の利用者・来場者・地域の人たちなど、様々な人を結びつけ、多面的に深まり広がっていることを実感しています。

その変化がうかがえる声の一部を、埼玉県障害者アート企画展終了後に寄せられたＴＡＭＡＰ±○メンバーの感想から集めてみました。

作家の変化

● 耳が聞こえず発語もない方だが、「飾られているよ！」ということを職員にアピールしてくれました。

● 一番うれしかったことは、普段見られないような満面の笑みで、「これが私の作品です」と、自分の作品の前で誇らしげにしている姿を見られたことです。

● 普段自分の作品に対して消極的な方にもかかわらず、友人を誘って見学にいくなど、励みになったよう。

● 作品を一つひとつ真剣に見ている様子がとても印象的でした。

● 個人の作家さんが、他の出展作家と出会うことで「自分もこの活動を紹介して、広げていきたい」と思うようになったと話していました。

● いろんな人の作品を見たことで、とても刺激を受けたよう。施設に帰ってから「こんな作品作ってみたいな」という話で盛り上がりました。

● 展覧会を見に行き、とても喜んでいました。いつも鳥の絵を描いていましたが、今は虫の絵を描き始め、影響を受けたのではと思っています。

家族の変化

● 本人と共に喜び、本人の活動を家族一同で支援し、それが、本人のモチベーションにもつながっているようです。

● 「このように作品にしてもらえたことがとてもうれしい。喜びであり自慢。近隣・知人にも伝えた。わが子は基本的に変わらないが、違った面があることを感じられるようになった」という親御さんの声がありました。

作品を見にきた施設利用者や職員の変化

● 自分と一緒に働いている人の作品が展示されていることを一緒に喜んでくれました。

● 「～さんの作品がよかった」という感想を職員に伝えてくれて盛り上がることができました。

● 見学することによって「自分も展示されているような絵を描きたい」とモチベーションを上げている方もいます。

● 「今度は私も選ばれたい」「展示したい」といった意見がありました。

● 自分の絵が飾られていなくても、見たことで刺激を受け、自分の中に反映させているようです。

● 一人ひとりの持つ力、作品、可能性を広く知らせていくことが大切で、それをどう伝えるかを考えるきっかけにもなっています。

● 職員も展覧会参加を重ねることで、いろいろな刺激を受け、みんなでアイディアを出しながら活動時の道具などを工夫して、楽しめるようになってきました。

地域への広がり

● 後援を町に依頼したことで、当施設で「絵を描いている」という認識が町に生まれ、挿絵依頼を受けました。また、町民ギャラリーに作品を展示しないかという誘いも受けました。

● 市役所より作品を挿絵に使用したいとの申し出がありました。

それぞれの深まり広がりの一例として
シンポジウムで発言された
親御さんの声をご紹介します。

支える家族の想い

―言葉と出会いに救われて

自閉症の息子を持つ母親です。息子は、就労B型事業所で、「できないこと」により精神を患い、行けなくなってしまいました。破壊行為など、どうにもできない状態に、私は何もしてやれず、生きるのも辛く、安定剤ばかり増えていました。しかし、心療内科の医師に、「何かほめてやれることはないの」と言われ、そう言えば6歳の頃から毎日100枚位絵を描いていたなと思い出しました。そして、工房集の活動を知り、息子にも好きな絵を描かせてあげようという気持ちになりました。

また、以前この障害者アート企画展の会場で目にした中津川さんの言葉にも救われました。今日のお話しに出ていた「一本の線でも、障害に負けないで一所懸命に引いた線は違う」ということも、この頃、わかるようになり、その線の表情の違いや本人が描く想像の意味にも、33年経ってようやく気づけるようになりました。

障害者でも、決められたことに従える子が良い子。暴れるのは困った子。悲しいことに、親もその世間の物差しを持って「人様に迷惑をかけないように」との願いで、彼を追いやっていました。

8年が経ち、ギャラリーで展示するご縁にも恵まれ、「ほのぼのとしたなんてやさしい絵なんでしょう」といった感想に、幸せを味わうことができました。作品を見た方が「やられた！」と言われたので、つい「すいません」と謝ってしまいましたが、それはいい意味だった様で、「絵本を作ってみませんか」との声までかけていただきました。

アンケートまとめ

「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」

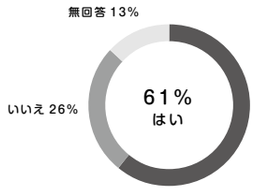
@春日部市

【感想】

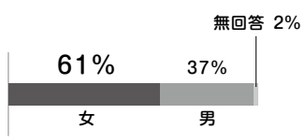
- とても和気あいあいとした雰囲気で楽しい時間でした。
- 食事をとりながらのんびりした雰囲気で作品を楽しむことができた。
- 一つひとつの作品をじっくり見れるような配慮がなされている感じを受けました。
- 会場の雰囲気がとてもよく、作品がよく映えていました。ピアノの演奏が生で聴けて、とてもよかったです。
- どの作品もそれぞれの世界観が見られつつも自由な表現と色彩豊かなものばかりです。
- 全体的にレベルが上がったような気がする。
- 今後とも、各施設がタイアップして、より多くの感動を発信してください。
- 事情はいろいろあるかもしれないけれど、もっと作品を売っていいと思います。この展覧会に並んだ作品たちには十分にその価値があるように感じました。
- どの作品もオリジナルのその人らしさが出ているものばかりだと思いました。作品に囲まれて食事ができるのは良いと思いましたが、食べている人のあいだをぬって作品を見るのは少し気まずかった。(作品を近くで見たかったから)
- みなさんの作品からエネルギーを感じます。いつも展示されているといいなあと思いました。
- 僕の絵も飾られるようにがんばります。

※グラフの数値は小数点以下四捨五入換算(以下同様)

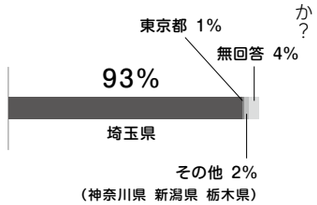
①障害者アートの展覧会を観た事がありますか？



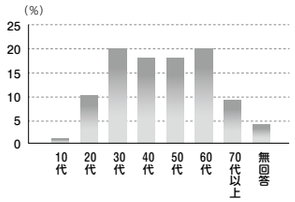
②性別



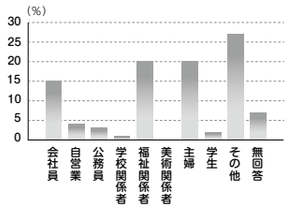
③どちらからお越しですか？



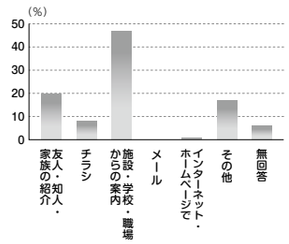
④年代



⑤職業



⑥来館きっかけ



1

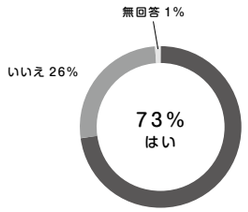
「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」

織り&グッズ展 ツグズムズ10 @川口市

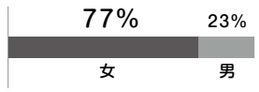
【感想】

- グッズがどれもかわいくてよかったです。来年も楽しみにしています。
- いつも来ると、素敵な作品に出会えるので、作品展を楽しみにしています。
- 野菜販売のテント、良かったです。
- 思わず買ってしまう素敵な展示でした。プレゼントにもすてきです。
- 企画力と商品力がとてもステキです!
- 織り・グッズ展毎年楽しみにしています。障害者アートであることを抜きにしても、作品(商品)の仕上がりの質が高く値段以上のものであると思います。何が飛び出すかわからないところも、毎年の楽しみの一つです。
- 多様な作品があり、十分に楽しむことができた。作品はいずれも色彩豊かで丁寧なもので、値段も妥当だと思った。このような作品展で重要なのは、同情心で購入してもらうのではなく、作品の質と価格を納得して購入してもらうことだと思う。
- ギャラリーとアトリエが一緒になっていて、とても面白い展示の仕方だと思いました。
- ケーキも毎回美味しいです。集カフェのファンです。
- どの作品(グッズ)も輝いて見えました。作品だけ見るのではなく、その背景や作者(人)をまず大事にされているということを改めて感じました。

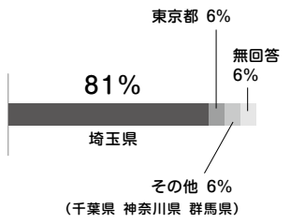
①障害者アートの展覧会を観た事がありますか？



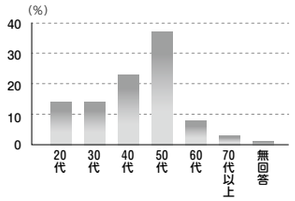
②性別



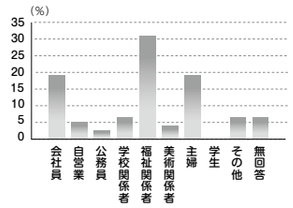
③どちらからお越しですか？



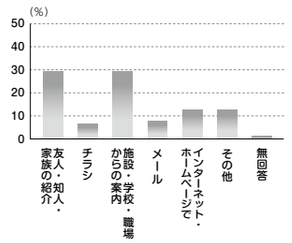
④年代



⑤職業



⑥来館きっかけ



2

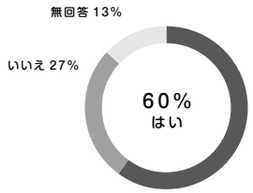
第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」@さいたま市

3

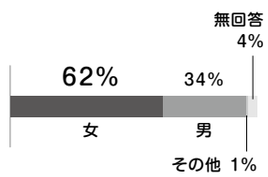
【感想】

- 共感する世界がたくさんあって、とてもドキドキしながら楽しめました。生身の人間のエネルギーをリアルに感じます。
- 発想が豊かで、見る方の感覚も広がる思いがします。
- 夢中で作品に取り組んだその様子まで目に浮かんできます。
- 新しく知る作家さんに刺激を受けたり、知っていた作家さんの表現の変化に驚いたりしました。
- なんだかわからない。バリバリヤバイ。ものすごい衝撃を受けました。
- 私ももっと自分を表現しても良いんだ!と元気をもらいました。
- 本人に会ってみたいと思う作品もあった。
- 作家さんが自身の作品の説明を誇らしげにされているのも印象的でした。
- こんな材料があったんだ、こんな使い方があったんだと技法を知れる上に、こんな飾り方があったんだと見せ方も勉強になります。
- 日常の作者の方の手から生まれるもの、ちぎられた紙コップや、小さく破った段ボールを丸めたものなどは見ていてストーリーを感じられました。展示も工夫されていて、とても素敵でした。
- 彼らの独特の表現にずーっと寄り添って、アートとして完成させているスタッフの方々の尽力に頭が下がりました。
- 去年は走り回っていた4歳の娘がとてもよく見ていて「ステキ」と。自分も作ってみたいと刺激を受けていました。
- 表現の自由を実感する1日でした。子どもたちにも大変良い刺激になりました。

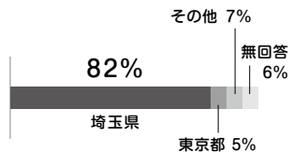
① 障害者アートの展覧会を観た事がありますか？



② 性別

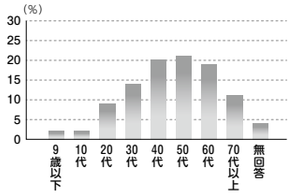


③ どちらからお越しですか？

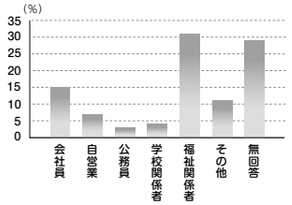


（その他…千葉県・茨城県・神奈川県・愛知県・栃木県・長野県等）

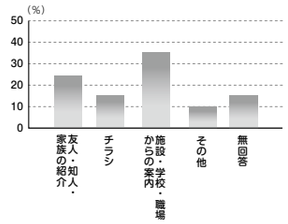
④ 年代



⑤ 職業



⑥ 来館きっかけ



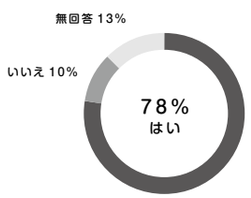
4

「うふっ♥埼玉でまたまたこんなのみつけちゃった♪」@川越市

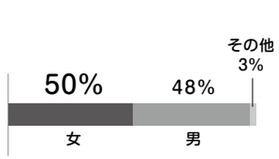
【感想】

- 多彩な作品群には感心するばかり。その中で今回は宮原さん、福島さんの特異な才能に触れることができた。特定の題材に対する徹底したこだわりの深さに底知れない才能を感じる。
- もっとPRをしてより多くの人に来てもらえるように市町村の広報に日時場所などをPRしてみては？　教育委員会などに働きかけてみてはどうでしょうか？他市町村（埼玉県内）で企画してください!
- 素晴らしい作品展を見せていただきありがとうございました。ただただ感動するばかりです。表現力の力強さに圧倒されました。何だか元気になれました!
- どんな障害があっても材料や規格にこだわらず、はみ出てしまう作品も是非作者の宝として大事にしてください。
- 独特の色彩感覚な作品が多く楽しかったです。制作過程も見てみたいと思いました。毎回とても楽しませていただいているので、多くの作品をこれからも出展していただきたいと思います。制作者やスタッフの皆様、ありがとうございます。
- みなさんの生き生きとした姿や作品に感動しました。本日はうかがえてよかったです。スタッフの方々や会場の温かさが大変心地よかったです。また楽しみにしております。
- ギャラリー呼友館の展示、壁の色、ライト（白熱灯）の柔らかな光が展示を引き立てていてとても良かった。展示もとても良かった。
- 障害者アートは継続が大切。継続を宜しくお願い致します。

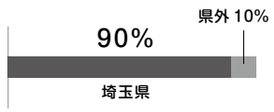
① 障害者アートの展覧会を観た事がありますか？



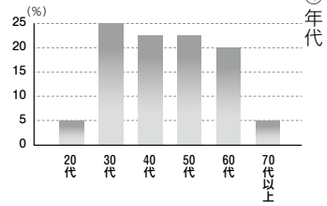
② 性別



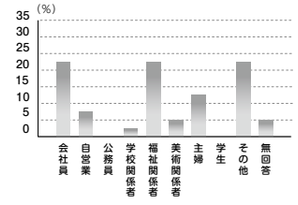
③ どちらからお越しですか？



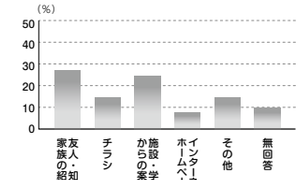
④ 年代



⑤ 職業



⑥ 来館きっかけ



Tamap Dancers Debut!!

ダンスの始まる瞬間、
そこには、すべての人に等しく
それぞれの美しさがあって、その瞬間
私達は、共に生きることを実感する。
ここに刻もう…
刻みにいくぞ―
ぼくたちのダンス！

表現の発信

ダンスワークショップ&公演

今年度は、美術以外の「新たな可能性の発掘」を目的にダンスのワークショップと公演を行いました。TAMAP±〇参加施設から募った16名が、9月から4回のワークショップに参加。12月の埼玉県障害者アート企画展で開催する公演を目指し、一人ひとりが自分の表現を模索しながら、みんなで一つのダンスプログラムをつくり上げていきました。

講師は、加須市を拠点に活動する「ベストプレイス」の主宰・竹中幸子さんに依頼。ベストプレイスは、10代から70代のメンバーが、障害の有無や性別、年齢の枠を超えて活躍するダンスグループです。当初は、重い知的障害のある子どもたちのために、親たちが立ち上げたサークルでしたが、指導を頼まれた竹中幸子さんが、親たちも巻き込み発足しました。「時間と場を共有して楽しむこと」「一人ひとりを尊重して活かす可能性を探ること」を大切に、17年間、定期公演などの活動を続けています。

今回のワークショップでは、その理念と実践にもとづくアプローチにより、みんなで楽しく動くことから、参加者それぞれの動きが広がり、表現の可能性が引き出されていきました。リズムに合わせ様々な動きを繰り返す中で、個々の表現が自信を得たような力強さを持ち始め、また、他者やみんなと一緒に動きを楽しむ中で、周りを感じながら表現するようになり、一見、バラバラな動きにも一体感が生まれていきました。

第1回WS
9/10（日）
@キャッスルきさい
（加須市）

1

初回は、日常の動作やしぐさなど様々な動きとその発見を楽しみました。人の動きに反応したり、メンバー同士の関係を築いたり、自分の表現を探りながら、動きをダンスにしていきました。

第2回WS
10/24（火）
@キャッスルきさい
（加須市）

2

初回同様、自由に体を動かすことを基本に、公演に向けて本番の構成や流れをつかみながら、ダンスパートの練習も進めていきました。

Tamap Dancers Debut!!

自由に一緒に動きながら
何かを感じとっていったよう

Tamap Dancers Debut!!

第3回WS
11/14（火）
@さわやか活動館
（川越市）

3

公演を意識しながらも即興性を大切に、協力し合ってダンスを形にしていきました。

まだまだ
ぎこちないけど
がんばっている

Tamap Dancers Debut!!

第4回WS
11/28（火）
@川口太陽の家
（川口市）

4

ゲネプロ。これまで同様、全身の動きを開放したり、他者や全体と動きでコミュニケーションを図ったりするウォーミングアップの後、本番の流れやパートの動きを確認しました。

みんなとふれあい
だんだん慣れ
笑顔が出てきている

Tamap Dancers Debut!!

みんな積極的に動き
まとまりができてきた

Tamap Dancers Debut!!

ダンス公演

第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」関連企画

「あはっ★埼玉でこんなこともやっちゃった♪」

12/10 sun

振付・構成　竹中幸子（ベストプレイス主宰）
舞台監督　杉江尚子
出　演　ベストプレイス
タマップダンサーズ（伊藤 裕・片波見知代・阿部美幸・高谷こずえ・白井美帆・水島理佳・藤咲恵里・内野良美・加茂智史・宮原貴晃・小林正人・飯塚 毅・金子正義・福田 拡・野澤 健・杉浦純子）

そして本番。タマップダンサーズ（WS参加者）とベストプレイスのメンバー24名がコラボレーションする約40分間のダンスプログラムを公演。会場の美術館・講堂に詰めかけた大勢の観客の前で、一人ひとりが堂々と個性溢れるダンスを披露。多彩な表現が調和したエネルギッシュな舞台をつくり上げました。本番前は、緊張した様子も見られましたが、終了後は、全員が大仕事を終えたような達成感に満ちた笑顔を見せていました。観客からは、「わずか4回のワークショップなのに凄い！」「みんな表情が真剣でかっこよかった！」「多様な表現に感動した」といった声をたくさんいただきました。また、一連のダンス活動は、参加者をはじめ担当者や周囲の人たちにも、いい影響をもたらしたようです。

観客の感想

- 笑顔がすごくあふれていた素晴らしい踊りでした。
- みんなが主人公になって生き生きしていました。
- 一人ひとりが楽しく表現していて、とても楽しい気持ちになりました。
- 一人ひとりの表情も身体の動きもとっても素敵でした。
- 体で表現することの喜びを共感できて素晴らしかった。
- 非常に躍動感があり、生きる喜びのようなものを感じました。
- 表現力の多様さに圧倒されました。私もダンスがしたくなりました！
- 表現というものの自由さを改めて感じることができました。
- わずかな練習時間でこれほど素晴らしいものができるのだと感心しました。
- 自分の施設でも活動の中で身体表現を取り入れてみたいと思います。
- 舞台表現の面白さは目を離せないこと、もっと見ていたいと思うこと、また見たいと思うこと。今日の公演には、そのすべてがありました。

参加者などの様子や変化

- WS前日はとても楽しみにして体中で表現していた。
- 変則的な日課を好まない方で最初は緊張気味だったが、次第に他の人と関わりを持ちWS前には「楽しみだね、よろしく！」と話していた。
- 元々仲良しの2人。一緒に参加してさらに仲が深まり、「ダンス楽しみだね」と話し、チラシの名前を見て喜んでいた。
- はじめは少し恥ずかしい様だったが次第に慣れ、WS会場に着くと「会いたかったよ」と笑顔でみんなの側に行き、いろんな人と楽しそうに取り組んでいた。
- 障害ゆえにうまく体を動かせないが、練習を重ねる度に、他の人を参考にしているのか、大きく体を動かすなど、より広い空間でダンスをしようとしていた。
- 公演に参加するという目標ができ、励まされたり声をかけられる機会が増えたことで、生き生きとした表情が多く見られた。
- WSでは毎回違う動きをみせ、本番では観客席でダンスを披露し会場の笑顔を誘い驚かせてくれた。
- 本番後、「楽しかった！またやりたい！」との感想が聞かれた。
- 記録した動画を楽しそうに見ている。
- いつも一人で踊っていたが、これを機にベストブレイスに入会。休日の余暇に好きなダンスが加わり、家族も喜び応援している。
- 日常に張り合いが出て明るくなり、家族からの反響も担当職員の期待感も予想以上に高まった。
- 普段は人前で何かを発表する機会がないため、本人のがんばる姿や楽しんでいる表情を見て家族も喜んでいた。
- 施設から大勢応援にかけつけ、終演後「良かった」「感動した」と声をかけられ喜んでいた。
- 施設内にポスターを貼り、寄せ書きを募り、がんばってというエールを送った。
- 施設の他の仲間も、WSに出かける仲間の嬉しそうな表情を見て「いいなぁ～」「どんなことしてるの？」と興味深々で、公演を「見たい！」という仲間もいた。

担当者の気づき

- 日常の空間では様々な「できなさ」のイメージに直結している形と動きなのに、舞台空間では強い「何か」を宿した身体として浮かび上がってくるように感じ、とても興味深い発見になった。
- 一人ひとりから踊る喜びや楽しさが伝わってきて、その強い思いに気づかされることがたくさんあった。
- 好きなものに取り組む大切さや楽しさが見ている人にも伝わることを会場で実感した。
- 知らない人の輪にすんなり入り込めるチカラがとても凄いと感じた。
- 普段とは違った楽しそうな表情が見られ、「こんなこともできるんだ」という可能性を発見できた。
- 難しい顔をして考えながら踊るという経験も良かったと思う。
- 見えない連帯感も感じられ、協調して助け合っている姿が見られた。
- 職員も同様にダンスの楽しさ、喜びを感じることができた。
- 他の施設の方との交流が持て、参加が楽しみになっていった。
- みんなが持っている「身体」という素材をこれからも表現につなげていきたい。
- 継続することで、今後の生活が、より豊かに色づくように思う。

講師プロフィール

竹中 幸子（ベストブレイス主宰）

お茶の水女子大学文教育学部表現体育専攻卒業。聖心女子学院教諭、県立川越女子高校非常勤講師等を経て、ウォルフガングシュタンゲ、アダムベンジャミンらのワークショップに触発され、障がいのある方を含むダンスグループ「ベストブレイス」を2000年に立ち上げる。クリエイティブアート実行委員会指導者養成コース修了。障がい児デイサービス、港区ふれあいアート事業による区内10数か所の保育園、群馬県女子体育連盟夏期講習会などで健常・障がいの子どもや教職員など幅広い人々を対象にダンスワークショップを展開。復興支援として、南相馬での保育園、仮設住宅でのワークショップリーダーの経験を持つ。自身のパフォーマンス活動に加え、2007年よりベストブレイス単独公演を年1回のペースで開始。2010年松島誠氏、2015・2016年鈴木ユキオ氏、2017年作曲家新垣隆氏との共演を実現。常に新しい可能性を探り続けている。

第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」関連企画

1 障害者芸術支援シンポジウム「埼玉県の取り組みから考える」

日時：2017年12月9日（土）10：00～16：00
会場：埼玉県立近代美術館講堂　定員：100名
対象：福祉、教育、アートに関わる方、行政、企業、その他関心のある方

埼玉県内の表現活動や支援の取り組みを参加者と共に多角的に考察する支援者育成プログラムです。単に情報や知識を得るのではなく、登壇する美術や教育の専門家、福祉従事者の話から、表現活動や支援はもとより活動の広がりやこれからについても、共に考える場となるよう対談やトークセッションを中心に企画しました。昨年度に続き定員を超え、障害のある子を持つ親や、福祉分野以外からの参加も多く、県内における障害者芸術文化活動への関心の高さがうかがえます。

［シンポジウム全般に関する感想］

- アートと福祉がもっと寄り添える社会になってほしいと思います。
- 福祉そのものの見方も変わります。福祉の実践としての可能性を感じました。
- たいへん面白く聞かせていただきました。みなさんの本気度、悩み、テーマが交わり、白熱した様子はショーを見ているようでした。

1 基調講演「好きと評価をめぐって」

前山裕司（埼玉県立近代美術館学芸員）

美術界の人は作品をどう評価しているのでしょうか？　それはほとんど語られないので、勘違いされているように感じる時もあります。決まった基準があるのでしょうか？　誰もが感じる、好き、嫌いと違うのでしょうか？　そんなことを話してみましょう。

※以下、要点のみ整理・編集して掲載

- 今、巷に様々な展覧会が溢れ、評論家も美術界も「作品評価をどう考えたらいいか」戸惑っている段階です。
- そもそも現代芸術には、何だかわからずゴミとして捨てられてしまいそうな作品が、たくさんあります。一般的に「きれい」と評価される作品は「もううつまらない」と思っている私のような美術関係者は、そういったゴミのような作品を本心から「素晴らしい」と評価しています。
- その観点から本展ほどゴミのような作品（ゴミとして捨てられてしまいそうな素晴らしい作品）が出ている展覧会はありません。

それを出せる自由さがある。何が出てきてもびっくりしない。それを誇っていいと思います。

- 作品の評価について、「作者の考えを読み取らないといけない」と勘違いしている人が多いようですが、学芸員など美術を学んだ人間は、「作者を考えるな」と教わっています。一旦、作者を切り離し、作品だけで評価する。「本人は評価されたくないのに勝手に評価して」と文句を言われることがありますが、そもそも美術は、そういうものです。
- 美術界での評価に、決まりはありません。「みんなが好きか」が一つの基準にはなりますが、それは「有名かどうか」ではありません。有名画家の作品にも駄作は山ほどある。
- つまり美術界では、みんな勝手に評価をしています。古今東西、評価されていないところから作品を探し、勝手に評価してきました。美術とは、そういったもの。そして、その「誰も評価してなくても評価すること」が大切なことです。
- 大事なのは、みんなが同じ評価をするのではなく、自分がいいと思うか、好きかどうか、作品を「愛せるかどうか」がポイント。私は、それが評価の基本だと思っています。
- その自分のアンテナに引っかかった作品を、同じように評価してくれる人が、どこかに必ずいるものです。
- 障害のある人の作品展では、作品を評価することで、作者や家族の生活に介入し、それを変えてしまうことがあります。評価は期待を生み、また、周りの人にも影響を及ぼす。そのことも、知っておいてほしい。
- そして、それを恐れず、「評価すべきものを評価する」。それが、美術関係者のとるべき道だと私は考えています。

［感想］

- ただのゴミと思われているものでもアート作品になることがあるという話に大変興味を持ちました。
- 美に対する価値観はあくまで一個人的なことであっていいと改めて確信が持てました。（ある種のコミュニケーションだとも思う）この「？」は生きていく上での糧だと信じています。
- お話にあったように、自分のアンテナに引っかかったものを信じ、何かを見たり聞いたりした時の感動や感想を、学校でも社会でも、もっと自由に発信できるようになればと思いました。

前山裕司プロフィール

埼玉県立近代美術館の準備室時代から同館に勤務。1988年「動きの表現」に始まり長年、同館で数々の展覧会を企画。また、ブダペストとモスクワを巡回した2003-04年「心の在り処」をキュレーション。2009年「障害者アートフェスティバル」実行委員を務めて以降、今年度まで「埼玉県障害者アート企画展」に携わり、また、2012年「アール・ブリュット・ジャポネ展」、2015年は埼玉、札幌、高知、福山を巡回した障害者アートの展覧会「すごいぞ、これは！」を企画。2016年は国立新美術館の展覧会「ここからーアート・デザイン・障害を考える3日間」を全体監修した。

2 対談「重い障害のある人の表現とは」

中津川浩章（美術家、アートディレクター）
松本 哲（みぬま福祉会総合施設長）

本展ディレクターと重度の障害がある人に長く関わる法人総合施設長が、それぞれの立場から、障害のある人の表現について語り合いました。

中津川：本展のキュレーションを7年続け、作品が変化しているなと感じます。前山さんの話にあった「ゴミのよう」だけれど心動かされる作品も増えている。それは美術的な視点だけではなく、福祉の現場の視点や価値観を取り込み選考してきたからです。選考会では、美術的な視点で直観的に気になっていた何かが、その生み出される背景を聞いて鮮明になり納得できることがよくあります。自分勝手に評価しながらも「これ何だろう」とみんなで考え議論すると見えてくる。そこには、人間が生きている感覚や目に見えないコミュニケーションがある。特に障害の重い人の作品では、それがビビッドに浮かび上がってくる。それをどう評価するか。展覧会はその揺れも含めて、その時の自分たちの考えや感覚が、鏡のように映し出されるものだなと改めて思いました。

新たな価値との出会い

松本：まず、これだけ多くの事業所が表現活動について一緒に取り組む時代になり、活動が点から面になってきたこと。そして、「ゴミのよう」と捨てられていた作品を問える時代になったことに隔世の感があります。福祉の現場でも「また壊した、ゴミを増やされた…」だから「それしかできない人」としてその行為や存在が否定されてきました。「太陽の家」には、そんな既存の物差しの評価により傷つき肯定感を喪失した人たちが集まって来ます。その既存の物差しにはまらない人たちの仕事を模索する中から表現活動が生まれ、今に至りました。中津川さんは、お互いが30代の頃から福祉とは違う立場で関わってくれていますが、何がそうさせているのでしょう。

中津川：最初は、作品が面白かったから。表現活動をしている施設などほとんどない時代、通常の美術とは違うところから生み出される作品がとても魅力的で、「どうして？」という素朴な疑問から興味が湧きました。そして、どんどん美術や自分の概念が壊され「人間とは」といった存在論的な疑問に謎が深まっていきました。特に重度の障害のある人の表現には、その謎がたくさんある。だから「ゴミのよう」とみなされていた行為の痕跡のようなものにもひかれていきました。

松本：当初、彼らの作品の良さがわからなかった私を、表現活動に駆り立てたのは、既存の内職仕事にはまらない人たちの主体的に見える生き生きとした姿でした。けれど、「うちの子は何もできない。迷惑しか掛けられない」と一旦、肯定感を喪失してしまった親たちには、そのことがなかなか伝わらず、また、工房集ができた頃は、周囲にも理解してくれる人は少なかった。しかし、専門家に評価され、作品展できちんと展示されることで、表現活動への理解が変わっていったように思います。そこで親たちが新しい価値観に出会い、「表現活動では否定されない」「我が子の表現が大事にされている」といったことも伝わっていった。

中津川：理屈でなく活動を通して、表現活動が障害の重い人たちの「生きることを応援するもの」と伝わり、家族の見方も変わっていきましたよね。

生きるための表現

松本：中津川さんの仲間（施設利用者）や表現へ向けるまなざしや評価が、展覧会などを通して社会的な機能として働き、仲間や親との信頼関係も深まっていったようにも思います。

中津川：僕自身、最初は重い障害のある人の行為をどう捉えていいかわからず、途方に暮れる感じでした。その一方、すごく魅力的でドキドキさせられる。それが同時にやってくる。そこには説明しきれない何かがある。だからその行為による痕跡を世に出して探ってみようと思いました。そして、困難な問題を抱えている人たちの表現に触れる中で、見えていなかったものがだんだん見えてきた。例えば、芸術のような文化は生活の上にあるものではない。「生きるためのもの」ということ。目が見えない西野克さんは、手に触れたものはすべて口に入れて砕き、最後は耳に入れて完結させる。その行為の痕跡には、何かひかれるものがある。問題行動と捉えられがちな行為ですが、それを探る中で彼にとっては、それが「世界を探るための表現」「生きることそのもの」と気づかされる。美術を超えて人間そのものを考えるようになっていきました。

松本：その気づきがとても大切で、重い障害のある人の表現に触れ向き合うことは、「人間をどうみるか」といった価値観を社会に問い、障害者に対する見方や社会的な存在価値をも、変えるものになるのではないかと思っています。２０１６年の相模原障害者施設殺傷事件は、障害の有無から優劣をつける「優生思想」によるもの。「何もできない人だから社会の迷惑になる」という。

中津川：優生思想のような理屈では、人はその理論の実感がなくても、その通りと思い込んでしまう。けれど、アートは感覚を通じて訴えるもの。作品を通じて「おもしろい」「すごい」と感じることで、理屈抜きに作者という存在を認識し、共感し、リスペクトが生まれる。それが、アートの可能性です。僕自身、それを感じて関わりを深め、人間や物の見方が変わったという実感があります。

松本：単に作品を飾るだけでなく「この価値を世に問いたい」という福祉の現場の私たちの想いに、応えてくれる機能にもなってくれたと思います。

中津川：僕は、社会と結びつけるメディウム（媒体）のような役割だと思っています。彼らの表現やその存在の社会的な価値を言語化してわかりやすく伝える。例えば、ある障害の重い人にとって一本の線を引くことは奇跡のようなこと。できないこととできることがぶつかり合い、それが線にリアルに表れる。その線をどう感じるか。そこがアート。それを内外に伝える。できることが美術ではなく、できることとできないことの狭間に美術があるのではないかと。さらに突き詰めると、重い障害のある人の日常では絶えず、生きることと死ぬことがぶつかり合っている。そのリアリティーが、行為や表現に表れる。言葉で表現できない代わりに表れているのではないか。そういったことを伝えています。

美術的評価を超える「平等性」という価値

松本：表現活動を始めた頃は、「描ける人の活動でしょ」と言う親もいて、なかなか活動の意義をわかってもらえませんでしたが、２０１２年に東京都美術館で工房集作品展「生きるための表現」を開いた辺りから、みんなが表現の「平等性」を実感し始めた気がします。「うちの子の作品はお金になりますか」といった質問もありますが、表現にはそういった評価とは別の価値があることに気づいていったと思います。

中津川：仲間１２０人の作品を展示して親御さんが一緒に喜んでくれましたよね。世間の美術的な評価は、表現に対する優劣であって人に対する優劣ではない。別の言い方をすれば、美術的に評価された作品も、評価されない作品も、同じ価値がある。等価である。美術は勝手に表現のクオリティを評価しているけれど、評価されない人も、作品を作らない人も同じという見方が大事ですね。

松本：一人ひとりの表現そのものに価値があり、「誰もが表現をしている」そのことをみんなが理解することが大事だと思います。

表現や関わりが人を育む

中津川：表現活動でもつい「この人の表現はこんなもの」と決めつけてしまいがちですが、単純に線や色を重ねていくような作品でも10年経つと明らかに変わっています。表現をしながら、自我が形成されているように感じます。

松本：表現活動を通じて「人格が育っている」「その人らしい風情が出てきた」と感じることもたくさんあります。

中津川：支援する人や周囲との関係性の中で、表現も変わり、自我も形成される。また、普段の振る舞いも変わってくる。目も合わせてくれなかった仲間が、ある時から急に親しく声をかけてくれるとか…。僕らの関わりを見て、仲間の方が僕らをジャッジしているのかもしれませんね。

［感想］

- 改めて表現活動を通して認められる、肯定される社会を作っていくために自分ができることを考えていきたいと思いました。
- 皆が肯定し合い認め合う場をつくっていきたいと強く感じました。

中津川浩章プロフィール

長年、記憶・痕跡・欠損をテーマに作品を制作発表する一方、（社福）みぬま福祉会 工房集等の表現活動にも携わり、障害者のアートスタジオや展覧会の企画・プロデュース等を手がけてきた。現在、福祉、教育、医療と多様な分野で社会とアートの関係性を問い直す活動、ワークショップや講演にも取り組む。キュレーションでは近年、「埼玉県障害者アート企画展」、「ビッグ・アイ アートプロジェクト」、「岡本太郎とアール・ブリュット」展を担当。ＮＰＯ法人エイブル・アート・ジャパン理事、ＮＰＯ法人アール・ド・ヴィーヴル理事、一般社団法人Ｇｅｔ ｉｎ ｔｏｕｃｈ理事。

松本哲プロフィール

生活協同組合職員を経て１９８３年より神奈川県内の通所施設に勤務。１９８５年、無認可作業所「太陽の家」を発足。翌年、知的障害者通所更生施設として認可された「川口太陽の家」の指導員を経て１９９２年、施設長に就任。現在は、法人の総合施設長、事務局長を兼務。また、障害の重い人たちの労働について取り組んできた経験を活かし、埼玉県発達障害福祉協会副会長・研修委員会委員長、埼玉県セルプセンター協議会理事、川口市自立支援協議会委員、川口特別支援学校学校評議員、越谷特別支援学校学校評議員、川口市障害者団体連絡協議会事務局長も務めている。

3 活動報告「埼玉県内の施設間のつながり、広がり、深まり」

埼玉県内でアートに取り組んでいる福祉施設の活動を紹介。昨年度、TAMAP±〇を発足してつながりを深め、共に学び合い高め合っています。

【感想】

- みんなが肯定し合い認め合う場をつくっていきたいと強く感じました。
- 関わり方や広め方などが詳しく聞けて良かったです。
- 埼玉県が障害者アートにとても力を入れていることがわかりうれしかった。私たちも関わりを広めるために、まずは横のつながりをしっかり持ちたいと思います。
- 職員の関わりの教育的側面に興味を持ちながら聞きました。教育実習の現場で子どもたちの日々の過ごし方のスタイルが絵に表れるという経験をし、日々の関わりこそ表現の源なのだと思っています。
- 埼玉は福祉施設の方々の熱意や意義を感じて取り組んでいる地域だなと思いました。

①埼玉県社会福祉事業団 あげお 多田美奈子

2014年度より埼玉県障害者アートマネージメントワークショップに一人の職員が参加することで、利用者の方の表現したものへの関心が強まりました。障害者アート企画展に応募したところ、まさにゴミ箱に捨てられていた作品が、選出されました。家族の喜びなどに刺激され、職員の意識も変わり、翌年度、表現活動が日中活動に加わりました。さらに、表彰や商品化という形で、出展の喜びや作品の魅力を共有する取り組みも始まりました。

昨年度は、出展作家がアーティストトークにも参加。施設内でも、作品を展示したり、作品のモチーフで自販機をラッピングしたり。それが地域の人の目に留まり、作品を広める機会も生まれています。また、TAMAP±〇での作品選考を、施設でも実践。職員が平等に選考に参加する経験が、表現活動への興味や理解につながっています。展覧会の実践で他施設から教わった額の作り方なども、活動の現場でとても役立っています。

作者や家族の笑顔に背中を押され、試行錯誤の4年間でしたが、今後も利用者の喜びや楽しみのために、職員みんなで力を合わせて取り組んでいきたいと思っています。

②みぬま福祉会 大宮太陽の家 佐藤佳織

2004年に開所した施設です。主な事業は生活介護ですが、みぬま福祉会では「働くこと」を大事にしており、当初は6名の仲間（利用者）でパウンドケーキを作り、販売していました。しかし、年々メンバーが増える中、パウンドケーキ作りに合わないメンバーも出てきたため、「仲間に合わせた仕事を」と、表現活動を仕事の一つとして位置づけるようになりました。言葉ではうまく表現できないけれど、自分のペースでのんびりと、歌ったり踊ったりしながら、それぞれの表現をしています。

絵を描ける仲間ばかりではないので、「拾う」「集める」「繰り返すこと」など、様々な表現を「捨てずに取っておくこと」を大切にしています。また、「これしかできないこと」を「いかに形にするか」についても、職員一同、試行錯誤しながら取り組んでいます。

そんな活動を続ける中で、パウンドケーキ作りを仕事にしている仲間からも、たくさんの作品が生まれるといった、広がりが生まれています。

③NPO法人 CーLひこうせん 野本翔平

表現活動をしながら「地域も巻き込むこと」を大切に様々な取り組みをしています。主な二つの活動を紹介します。

「ａｍｐかわいいサミット」。これは毎夏、熊谷市の八木橋百貨店で開催しているイベントです。目的は、私たち（ひこうせん）が「かわいい！」と思うものを発信し、それにより障害のある人たちの自立と社会参加を促進することです。百貨店が求めるクオリティを目指すことで、地域の福祉施設の商品の質を向上させたり、施設同士の横のつながりが生まれたりしています。2回目以降は、近隣施設や団体と実行委員を組織して運営しています。

もう一つは、「忍町アートギャラリー」。これは、地元行田市を「日本一アートな町にすること」を目標に、地域の有志を巻き込み一緒に取り組む、地域密着型アートプロジェクトです。商店街の店などに作品を展示し、街歩きと一緒に楽しんでもらうイベントを開催。これも実行委員で企画運営しており、福祉施設だけではできないことにも挑戦でき、また、地域の人たちとの関わりや相互理解も深まっています。障害者と健常者の違いを超え、住民同士として「自分たちの地域をより良くする」という目的に向けて一緒にがんばっています。

4 クロストーク
「福祉、教育、美術など、様々な角度から見た障害のある人の表現の本質や展望」

小澤基弘（画家、埼玉大学教育学部教授）
酒井道久（彫刻家、埼玉県立大学名誉教授）
石平裕一（NPO法人かうんと5代表）
豊田亜紀（多機能型事業所わっくす）
モデレーター：**中津川浩章**（美術家、アートディレクター）

「表現活動状況調査」や「作品選考会」など障害者アートをめぐる埼玉県独自の取り組みについて、その意味合いと可能性を美術の専門家と福祉施設のスタッフがそれぞれの立場から、時に脱線しながら語り合いました。

障害者アートと選考にまつわる意見

石平：選考会は「どんな作品が出てくるのだろう」というワクワク感があります。常連作家の作品も年々、魅力を増し「さらにワクワクできるか…」そんな気持ちでのぞんでいます。ただ、自分の事業所の作品説明になると「この方は自閉的で」とつい人物や背景を語ってしまう。本当は「この色が」と作品を語りたいのに。そこが僕のクセなのか…。でも、美術の専門家と選考する中でフラットな感情になれてきたような気がします。

豊田：自分の施設の作家を推したい気持ちがありながら、いいと思った作品もプレゼンできる。その空気感がありますよね。一個人として作品を見ながら選考を楽しめる。自分の施設の作品をプレゼンする時は背景を語るけれど、背景を知らなくても圧倒的な力を感じる作品にも出会えます。

中津川：この展覧会は、福祉と美術の文脈がクロスオーバーしてできています。僕ら美術の人間は、直観力や美術の文脈から見ているけれど、福祉施設の職員が選ぶ作品もおもしろい。福祉的な視点から語る作者や作品の背景を聞いて、心を捉えていた何かが見えてくることもあります。

酒井：障害者アートの選考の場合、私はまず、奇抜さや不思議さに目が留まります。精神障害や発達障害の人の不思議な作品。その次に構成や色使いなど。一方、一般の展覧会の選考では奇抜さはほとんどなく、構成や色使い、さらに何を表現したいかといった要素が加わる。

小澤：私は多くの選考に携わっているので、自分を信じて瞬間的に判断し、完全に作品のバックグランドは遮断します。奇抜さについては、作為的なものではなく、みんなが持っているもの。人間の本性が奇抜なのだと思う。健常者はそれを隠しているが、障害のある人の作品には赤裸々に表れている。奇抜というより、本性や本質を見せつけられているのだと思います。

中津川：障害のある人の表現はプリミティブな感覚に近いものが多く、人間の本質的なものが意図しないで出ているから感動も深い。個を越えて、集合的無意識へ広がって本質的なものが本能的に表現されているところに、人はひきつけられるのだと思います。

小澤：障害のある人の表現を知る以前は、重い障害のある人は自己省察（自らかえりみて考えること）ができないと思っていました。しかし、実はできている。いつも同じと思っていた作品も、よく見るとどんどん変化している。造形的な扱いも知的で知性が感じられる。彼らの作品を見ていると「知的障害」などその言葉自体がおかしいと思うようになりました。

酒井：障害者アートは、背景を知ると益々わかる。そこが一般のアートと違う。また、選考では入選を楽しみにしている作者のことなどを考慮してしまいがちで、そのジレンマがある。だからと線を引く必要はないが、障害者アート展とする以上、基準を設けたい気持ちがあり、背景を知ると見えてくる作品はコーナーを分けて展示したらどうかと思うのですが…。

中津川：そういった展覧会もあっていいが、そこで見えてくる問題は別にあると思います。障害の区分や見せ方を分けることで、見る人に先入観を与えてしまうこともある。多様な表現がクロスする場に可能性があり、作品も互いに影響し合い、おもしろい展覧会になると思っています。

小澤：障害者であるかどうか。この線引きも難しい。ゴッホもある意味、障害者だが、アウトサイダーアーティストには分類されない。何をもって障害者アートとするのか。する必要があるのか――この展覧会には、それを考えさせられる作品がたくさん出ています。それを多くの人に見てもらい、みんなに考えてもらいたい。

表現活動の課題や広がり

中津川：就労支援と生活介護では、表現活動の意味づけも支援も違うと思います。障害や施設によってもその課題は異なると思いますが。

豊田：うちのような精神障害の方が中心の就労支援施設では、メンバーと時々、「この作品には敵わないね」という会話が生まれます。眠れずしがみつくように描いた作品は、なかなか凄いものがあり評価もされる。けれど、症状が落ち着くと奇抜さなどは薄れあまり評価されない。それをどう受け止め解決するか…。難しい課題です。

石平：うちの施設には、モチーフを提示しないと描けない人もいます。画材もスタッフが用意して、最後は本人の作風に委ねるけれど、それは湧き上がる衝動からの表現とはまた違う。その辺り、支援する側として悩むところです。「描かせているんじゃないか。本当は嫌だったらどうしよう…」と揺れながらも、その人にとって描いている時間が穏やかで心地良いものになることを大事に続けています。

中津川：表現活動に限らず、それぞれの生きる尊厳を守る活動が大切ですよね。その辺り、どのように取り組んでいますか。

豊田：うちの就労の現場では、売れるグッズを作って売上を上げる、すばらしい作品を見てもらい買い求めてもらうことを、メンバーは夢見ています。しかし、資金的にも人材面でも精一杯で、お金を得ることだけを求めていたら続きません。亀の歩みでやり続ける中、例えば、con＊tioさんにアート活動の会議に参加してもらい商品化について一緒に考えてもらったり、TAMAP±0のつながりで「amp かわいいサミット」に似顔絵ライブで参加をさせてもらったり…。そのつながりからそれぞれも得られるものがあるので続けられています。

石平：個別支援計画を立てる際、以前は、例えば「絵ばかり描いていたら運動不足になるから他の活動もやらせないと」と計画が立てられていました。それも新たな提案になるかもしれないが、「それだけでは良くない」と決めつけてしまうのは違う。どんな活動も利用者と向き合い、いかに個人を支援するかが基本だと思っています。アートが課題になってしまうなど、縛られるものにならないように気をつけています。

中津川：表現活動は人間にとって生きる力にもなる。自身が癒されながら、それが社会化した時、他者に影響を及ぼす変化を見せる。また、それを仕事にするという、もう一段階別の社会化もある。埼玉では、作品の多様性を含め、多面的な広がりのある取り組みが行われていますが、教育やセラピーの側面からは、どんな可能性があるでしょう。

小澤：子どもたちの描いている絵を見ているとわかるのですが、学校にもグレーゾーンの子どもがたくさんいます。しかし、表現から何の障害だと断言できるエビデンスがない。埼玉では表現活動状況調査で表現を集めていますが、早く表現と障害の相関を示せるように分析すべきだと思っています。それが教育現場に役立つ。子どもたちを救えると思います。

酒井：7年近く若年性アルツハイマーのアートセラピーに携わる中で「アートにはいかにチカラがあるか」実感することがいろいろありました。セラピーは独特の手法で、まずデッサン力は求めない。「うまい」は禁句。特に印象に残っているのは高次機能障害の50代の男性で、最初は「絶対描かない」と言っていたが、アクリル板に絵の具を垂らす抽象画をやったら「今度いつやるのか」と。それから5年以上描き続けていました。

行為性の作品について

中津川：今回の選考会では行為性の作品が多く、小澤さんから「そこに美が感じられるかどうかだ」という意見もありました。その表現をどう捉えるか――いろんな考えがあると思いますが。

小澤：美術では、完成を判断することが大切。障害のある人の表現も本人が「ここで終わり」と意識しているかどうか。それにより違いがある。しかし、美術は一人でするものとは限らない。支援する人、発見した人とのコラボレーションもありだと思います。

中津川：創作に手を加えるのではない、作品を価値づけていくという意味でのコラボですね。本展の展示では、自分では言語化できない人たちの行為性の作品は、できるだけその世界観が伝わるよう、担当者が彼らのこだわりなども考慮して展示しました。

酒井：先ほど、中津川さんの話に出ていた、手に触れたものを噛んで耳に入れて完結させたものなどは、時間芸術ではないかとも思える。障害のあるなしの違い、現代芸術と障害者芸術の違い…考えることが多くなりました。

中津川：アートは見る人の想像力を喚起させるもの。すべての表現や行為がアートではないと思うが、はっきりした評価基準があるわけではありません。ただ、多様な表現があることでアートの地平が広がります。アートには社会を変える力がある――その思いで今後も一つひとつの表現と向き合い、みんなで考えながら多くの作品を発信していきたいと思います。

［感想］

- アートというよりも、人間の生きる事の意味や、哲学的なところまで話が広がり（深まり）考えさせられました。
- 共感できることがたくさんありました。他施設の方も同じように迷いながらも優しさを持ち日々関わっていることがわかり良かったです。
- 「学校にもグレーゾーンの子どもが多い」という話。先生たちは何か違うと感じていても、どうすればいいかわからない。音楽や美術は減らされていますが、もっと「表現」のチャンスがあったらいいのにと思います。

小澤基弘プロフィール

絵画及び美術教育の芸術学博士。長年、画家として作品を制作発表する一方、絵画を中心に理論研究を行い『絵画の教科書』等の著書も多数刊行。近年は、絵画制作者の経験を踏まえ、学校教育における図工・美術教育の研究も行う。「ドローイング（主観的・表現主義的素描）」を制作の主たる手立てとし、大学教育でもドローイングを積極的に導入。ドローイング制作と対話を通して、学生それぞれが自らの表現の核心を主体的に探る教育を心がけている。その教育実践から近年、人間の表現の根源に関わる障害者アートの可能性に着眼し、その領域の研究も進めている。

酒井道久プロフィール

新具象彫刻展（東京都美術館）創立に参加。国際交流展「センツァ・フロンティエーレ展」、「彫超兆　彫刻8人展」等で作品を発表する一方、埼玉県立衛生短大、埼玉県立大学社会福祉学科で美術関連教養科目、保育関連科目を担当。障害者アートの研究指導や、不登校児童・家族のアートプログラム、若年性認知症患者・家族のアートセラピー等に携わる。主な彫刻作品：大島小学校創立50周年記念「まだ見せない宝物」、千駄ヶ谷小学校創立120周年記念「大発見」、「中西悟堂像（日本野鳥の会）」（軽井沢ホシノ）、伊能測量200年記念「伊能忠敬像」（富岡八幡宮）等。

2 障害者芸術支援研修会「権利保護や商品化に関するセミナー」

日時：2018年2月3日（土）13：30～16：30　会場：社会福祉法人みぬま福祉会　川口太陽の家

表現をさらに社会につなげるために大切な「権利保護」や「商品化」。今回は定員を50名に絞り、より現場に即した具体的な事例を紹介して参加者の悩みにも応えました。福祉施設職員以外に企業や学生の参加もありました。

［セミナー全般に関する感想］

- 日常の仕事を見直すことができた。職場に帰って同僚に伝えたい。
- 直接役立てられるお話がありがたかった。
- 障害がある方を支えてくださるスタンスで、言葉の一つひとつが心にしみわたった。

こういったセミナーは、こちらが元気になれる。

- わくわくするお話が聞けて、とてもうれしかった。
- とても勉強になりました。またこのような機会を楽しみにしています。

1 「知っておきたい『アートと法律』の話」

講師：**岩本憲武**（弁護士／モッキンバード法律事務所）

協力委員でもある岩本先生が「著作権」など表現活動に関わる法律について、事例をあげながらわかりやすく解説。

自由な発想でバラエティ豊かな障害者アートの数々。でも、こんな作品ってアリ？　クレームがついたらどうしよう――そんな疑問や心配に答えてくれました。

［感想］

- 普段気にかかっていても、なかなか法律に関する話は聞く機会がないのでとても良い企画でした。
- 難しい内容を簡単にわかりやすく教えていただきありがとうございました。
- 著作権・所有権とてもわかりやすい説明でした。「TOYOTA」などと入った車の絵を描く利用者の作品も著作権に注意しながら作品づくりを進めていきたい。

岩本憲武プロフィール

1999年弁護士登録。埼玉弁護士会所属。東京、埼玉の法律事務所で民事、刑事事件と幅広く経験を積み、2006年、岩本法律事務所を開業。2016年以降は弁護士法人モッキンバード法律事務所（さいたま市浦和区）に参画。現在は重大事件・少年事件を含む刑事事件全般の弁護活動を中心に、個人や企業等の代理人として活動。埼玉弁護士会裁判員制度委員会、埼玉県児童福祉施設協議会子ども・施設サポート委員会など各種団体の委員等も務める。

Topics

セミナーの内容から一部抜粋してご紹介！

「所有権」と「著作権」の関係は？

意外とモヤモヤっとしてよくわからなくなってしまうのがこの2つの権利です。

まず、作品を描いた人（作者）には「著作権」があります。これを売った場合、作品の「所有権」は買った人に移ります。「所有権」を持った人は、作品を他の人に売ることもできるし、極端な話、捨てちゃうかもしれない。しかし、そこに表現されている絵の「著作権」はまだ作者にあります。

「著作権」を持っている作者は、手元に原画がなくても、複写して絵葉書にするなど、絵の価値を利用することができます。逆に「著作権」まで譲ってしまうと、自分の絵の価値を利用できなくなります。作品を買った人がその絵を利用して、お金を得たり価値を世の中に広めたりするには、「著作権」も譲ってもらわないといけないということです。

このように「著作権」と「所有権」とは別の物です。

［ポイント］

- 施設全体で「作品の扱い方」を話し合い、文章化しておきましょう。
- 各作品について「著作権」「所有権」が誰に帰属しているか、はっきりさせておきましょう。
- 作者、家族、施設の間で話し合い、「作品の取り扱い方」をできれば「文書」にしておきましょう。

具体的な内容は、作者の障害の程度や家族の意向、施設の方針などによりケースバイケースです。

契約の時に気をつけることは？

契約は約束のこと。お茶1本買うのも契約です。「契約書」がなくても契約は成立します。

契約書はお互いのために約束の内容を文書にしたものです。「後日もめないこと」が最大の目的で、形式より「中身の明確さ」が重要になります。「契約書」「第一条～」なんて書かれていないメモでも契約書になることがあります。

［ポイント］

- 契約をする時は5W1Hが明確になっているか意識しましょう。
- 「受け入れられない内容」は修正や削除を求めましょう。

ただし、すべてに有利な内容を求めてしまうと、契約が成り立たなくなってしまうので注意。

- 契約書を作成しない場合も「これからのため」に、メールやFAXでのやり取りで「約束の内容（5W1H）」を確認して残しておきましょう。

2 「施設商品のもつ役割と魅力」

講師：杉 千種・山口里佳（con＊tio）

表現活動の広がりと共に施設商品への注目が増し、その取り組み方への関心も高まっています。グッズ研修会のアドバイザーを務めるコンティオが、施設での商品づくりの基本的な考え方や重要なポイントなどを話しながら、来場者の質問に答えました。

【感想】

- 商品は作っている人のことを知ってもらう大切なツールである、という言葉がとても印象に残った。丁寧に作者のこと、社会にどう発信するかということを考えて作るから、とても魅力的になるのだと思った。
- 「福祉っぽい」を抜け出すことが、障害者アートがさらに発展をするにはとても貴重だと思った。
- 福祉施設から世の中に発信していけるものを今後も心を込めてつくっていきたいと思った。
- “日常の「いいね！」をカタチにしていく”そんな素敵なことに何らかの形で関わっていけたら…と夢が広がりました。
- 一つの商品を作るのに、こんな突っ込んだミーティングをやっているとは、知りませんでした。
- 福祉とデザインや商品化の専門家をつなぐ役割は、とても大きいと感じた。
- 心動かされる施設商品は、買ったら終わりではなく買った時から始まる。そんな商品のファンです。

con＊tio
障害とアートを軸に中間支援を行うNPO法人のスタッフとして培った社会福祉観をもとに、2014年にコンティオを設立。様々な福祉施設とそれぞれの課題に一緒に向き合いながら、商品開発やアトリエ活動のサポート、展覧会やイベントのコーディネートをしている。福祉の現場・人の魅力を引き出せるような役割を目指して活動している。

●グッズ研修会

講師：杉 千種・山口里佳（con＊tio）

今年度は全9回（5月～9月：各2時間）に17団体が参加。「何のための商品化なのか」を考えながら、施設の商品開発やそのクオリティ向上を目指す研修です。価格設定や流通、商品管理など基本的な考え方を学び、研修で開発・改良したグッズ等は11月のグッズ展で紹介・販売しました。

●アトリエ見学ツアー

当法人の5ヶ所のアトリエを巡り、制作の様子を見学しながら、表現活動には何が大切かを考えてもらう研修です。展覧会関連イベントとして今年度は3回実施し52名が参加。日程が合わない場合は別日に対応しました。

各アトリエでは、スタッフが法人の理念にもとづく職員の関わりや、表現活動による作者の変化・成長を伝えるほか、作者自らも作品について紹介。最後に、後援会が運営する「集力フェ」も体験してもらい、スタッフ（利用者家族）からも法人との関わりや表現活動について語ってもらいました。

【感想】

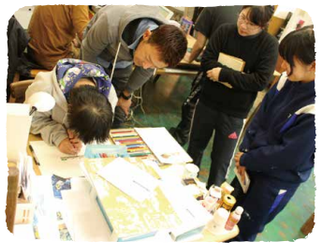
- とにかく継続していくこと、少しずつでも…という思いを新たにしました。仲間と職員と家族がトライアングルとの話…家族の協力をしっかり得られている点、いろいろな人たちを巻き込んで進めていく、社会に発信していくことが大切ですね。
- 一人ひとりの「好き」や「やりたい」気持ちを一つでも多く見つけ、社会とつなげられる様になりたいと感じました。

●インターンシップ研修

表現活動の支援のあり方を共に考えることを目的に一日現場に入り、障害のある人の創作現場とスタッフとの関わりを、体験を通して学びます。今年度は、翌年度表現活動を開始予定の施設やさらに表現活動を広げたいと考えている施設の職員と、美術を学ぶ学生の6名が、工房集にて実施。創作に入る前の関わりや、作者や表現について語り合うことからも、表現活動の大切なことを学んでいきました。

【感想】

- スタッフの方が仲間のみなさんのことをよく見ているのだと感じました。一人だけではなく、周りとの関わりの中で作品ができていることがすごいと思いました。
- そばに行くと、みなさん作品について教えてくださって、自分のことや作品のことを発表する力があるってすばらしいと思います。また、スタッフの方もどなたも仲間の方一人ひとりのことを詳しく話してくださって、みんなでわかろうとしていることが素敵だと思いました。
- 自分の支援の振り返りをすることができたのが、何よりの収穫でした。TAMAPでのつながりを持ちたいので、参加できると良いです。



相談支援

アートセンター集では、昨年度より相談窓口を開設。今年度（6月9日～3月26日）は、550件の相談がありました（県内209件、県外341件）。

最も多かった相談は昨年同様、「見学したい」です。当法人では、重度の障害のある利用者も「仕事」として日常的にそれぞれの表現・創作活動をしていることから、活動や支援のあり方への関心が高く、昨年に引き続き多くの見学を受け入れました。主に、当法人の5つのアトリエを巡る「アトリエ見学ツアー」を紹介していますが、多くは日程が合わず個別見学で対応しました（見学者287名）。見学の際も様々な質問や相談に応じています。

増加傾向にある相談は、「作品を発表したい」や「展覧会を開催したい」です。昨年度よりアートセンター集が知られるようになり、作家本人や家族から「作品を見てほしい」「発表したい」という相談が増えています。また、大学から障害者アートの「展覧会を開催したい」という相談が2件もあり、学生などと共に開催。「作家に講義してもらえないか」との相談にも応え、3名の作家が学生を前に表現活動について話す機会を得られたことは、大きな成果となりました（P75に学生の感想を掲載）。

表現活動をする事業所が増える中、創作環境だけでなく表現活動をどう位置づけるかの相談や、著作権に関する相談も昨年より増え、障害のある人の芸術活動の広がりと共にその支援の深まりを感じています。また、個人への対応では、表現活動の基盤は生活にあり、その充実を考えて支援や相談にあたることの大切さ、他の支援機関や専門家等との連携の重要性を改めて感じました。

相談 ベスト5　誰からのどんな相談に多く対応したか

1	作者・作家	充実させたい	58
2	大学・研究機関	取材したい	57
3	作者・作家	作品を発表したい	48
	福祉事業所	見学したい	48
4	企業・市民	見学したい	36
5	大学・研究機関	見学したい	22

相談件数＊ 550件
県内209・県外341
2017年6月～2018年3月

＊ 相談件数は、「障害者の芸術活動支援モデル事業」連携事務局の集計方法に従った相談対応件数です。

相談内容 ベスト5　全体で多かった相談

1	見学したい	123
2	充実させたい	76
3	取材したい	67
4	作品を発表したい	55
5	売りたい	35

相談者別件数　相談が多い順に

c	福祉事業所	151
a	作者・作家	150
g	大学・研究機関	123
f	企業・市民	85
d	国・自治体	18

相談分類表

2017年6月～2018年3月

相談内容				相談者	a 作者・作家	b 特別支援学校	c 福祉事業所	d 国・自治体	e 美術館・ギャラリー	f 企業・市民	g 大学・研究機関	h 報道関係者	z その他	合計
1	創作環境に関する相談	1	法的助言を要しない	1 はじめたい	5	0	15	0	0	0	2	0	0	22
				2 充実させたい	58	0	16	0	0	0	2	0	0	76
				3 関わりたい	4	0	0	0	0	2	0	0	0	6
				4 特定の作家に会いたい	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
				5 見学したい	5	7	48	0	4	36	22	0	1	123
				6 作品の保存について	0	0	4	0	0	0	0	0	0	4
				その他	15	0	1	0	0	0	0	0	0	16
		2	法的助言を要する相談		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			87	7	84	0	4	38	29	0	1	250
2	展示機会に関する相談	1	法的助言を要しない	1 作品を発表したい	48	1	5	0	1	0	0	0	0	55
				2 出展を依頼された	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				3 展覧会を開催したい	0	0	7	2	1	4	4	0	0	18
				その他	0	0	7	9	0	0	0	0	0	16
		2	法的助言を要する相談		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			48	1	19	11	2	4	4	0	0	89
3	作者の権利保護に関する相談	1	作品出展	1 出展契約を締結したい	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
				その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				小計	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
		2	作品寄託（寄贈）	1 寄託（寄贈）したい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				2 寄託（寄贈）を受けたい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		3	作品の二次使用	1 二次利用を依頼された 1 商品化	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				1 二次利用を依頼された 2 写真掲載	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				1 二次利用を依頼された その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				2 二次利用したい 1 商品化	0	0	4	0	0	1	20	0	1	26
				2 二次利用したい 2 写真掲載	0	0	0	0	0	6	2	0	0	8
				2 二次利用したい その他	0	0	0	0	0	6	0	0	0	6
				その他	1	0	0	0	0	2	0	0	0	3
				小計	1	0	4	0	0	15	22	0	1	43
		4	作品売買	1 売りたい	0	0	16	0	0	19	0	0	0	35
				2 買いたい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				小計	0	0	16	0	0	19	0	0	0	35
		5	1 作品の取扱全般に関する相談		1	0	19	3	0	2	0	0	0	25
			2 成年後見制度利用に関する相談		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			小計		1	0	19	3	0	2	0	0	0	25
4	取材	1	取材したい		0	0	4	0	0	4	57	2	0	67
		その他			0	1	0	0	0	3	9	2	0	15
		小計			0	1	4	0	0	7	66	4	0	82
その他の相談					13	1	3	4	0	0	2	0	1	24
合計					150	10	151	18	6	85	123	4	3	550

相談事例× 7

相談事例①

福祉事業所「表現活動を始めたい」

内容　次年度から生活介護施設を開所予定。表現活動を支援に組み入れたい。

回答・対応

1. 施設見学
「アトリエ見学ツアー」の情報をお知らせし、参加に至る。工房集での展覧会と共に、5つのアトリエでの創作活動の様子や職員との関わりを見てもらう。

2. インターンシップ研修
他の職員にも見てもらいたい、もっと深く知りたいという意見があり、「インターンシップ研修」の情報を伝え、4名が参加。3つのアトリエの現場で、1日職員の関わりや、環境設定などを体験してもらう。

3. 情報提供
見学ツアー以外の人材育成研修や、県内の施設職員が展覧会の実践を通して日々の悩みや情報を共有できるネットワーク、TAMAP±〇があることを伝えた。開所後に参加予定。

相談事例②

福祉施設職員「作品の価格をどう考えたら良いか」

内容　表現活動が施設内に広がり、展覧会等の機会が増える中、「作品を買いたい」という声も出てきている。そもそも表現活動をどのように位置づけていくか、また、作品売買の際の価格設定や注意点を教えてほしい。

回答・対応

1. 情報収集
施設内でどのように表現活動が取り組まれているのか、聞き取りを行う。また、作品売買に関する著作権等を施設としてどう考えているか、確認した。

2. 面談・情報提供
当法人の表現活動の位置づけや価格設定、著作権に関する取り組みなどの情報を提供。しかし、あくまでも一例で、すべて施設内で話し合い共有することが大切であるため、訪問しての対応も可能だと伝えた。

3. 専門家と訪問し、話し合いの場を設ける
美術の専門家と事前に情報を共有し、施設に訪問。創作の背景を語り合い、表現について考え、施設内で共有してもらう機会とした。また、創作現場や作品も拝見。専門家が美術業界における作品価格の考え方などを教え、外部の評価を得ながら各部署より参加した10人の施設職員と価格設定を検討した。

相談事例③

相談支援専門員　「絵を描いている相談者がいる。作品を見てほしい」

内容　生活支援の相談で関わっている障害のある方が、家で絵を描いている。
一度、アートセンター集で作品を見てもらえないか。

回答・対応

1. 情報収集
相談支援専門員から支援状況など詳細ついて情報収集を行う。

2. 面談
本人から生活の様子や思いを丁寧に聴き、描いた作品も見せてもらう。「埼玉県表現活動状況調査」の情報を伝え、提出を提案。また、自由に絵を描く活動の場を紹介した。

3. 展覧会への出展
本人の意思を受け、調査票を提出。選考に通り、第8回埼玉県障害者アート企画展の出展につながった。展覧会には家族も来場し喜んでいた。生活の支援も視野に入れ、引き続き相談支援専門員と情報を共有し対応していく。

相談事例④

精神障害のある作家　「作品を展示したい」

内容　昨年度からの継続。自宅で絵を描いている。公募展などがあれば教えてほしい。

回答・対応

1. 状況確認
メールや電話で定期的に本人や家族の状況、描いている絵についての連絡が来るので、その都度対応し、思いを聴き取る。

2. 情報提供
本人の作品に合った公募展があったので、情報を伝えた。とてもやる気になり、応募。

3. 展覧会への出展
公募展に見事通り、作品が展示された。本人から連絡があり、喜びを共有。創作にも勢いがつき自身で個展を企画し開催に至る。

相談事例⑤

発達障害のある方とその家族　「日中の活動場所を探している」

内容　就労移行や就労支援B型に所属したこともあるが、うまくいかずに辞めてしまう。
絵は好きで家で描いている。今後の活動場所を探している。

回答・対応

1. 面談
工房集にて面談を行い、相談者の思いを丁寧に聴き取る。また、表現活動を仕事として取り組んでいる当法人のアトリエを見学してもらう。

2. 相談支援員につなぐ
表現活動の支援だけでなく福祉的な支援が必要だと判断し、相談支援専門員につなぎ、面談を行う。

3. 実習を行う
以前の事業所でうまくいかなかった経験もあるので、まずは表現活動をしている事業所で実習をしてみて、考えてもらう機会をつくった。

相談事例⑥

大学教授 「大学内のギャラリーで展覧会を企画したい。障害のある人の表現活動について講義してほしい」

内容 構内のギャラリーで工房集の作家の展覧会を開き、学生に表現を感じてもらいたい。また、学生たちに表現活動の話を聞かせたい。

回答・対応

1. 企画についての確認

展覧会のコンセプトや期間、搬入出等について確認。また、講義の内容についても共有し、当法人や埼玉県の事例を伝え、障害のある作家による講演を提案。

2. 展覧会の開催・講義内での講演

学内のギャラリーで展覧会を開催。また、会期中の講義で講演。出展作家3名が、約80名の学生に向けて、作品への想いや表現活動での自身の変化などを話す機会をつくった。

相談事例⑦

大学教授・学生 「展覧会を企画したい」

内容 大学の学園祭に合わせて展覧会を企画したい。美術を学ぶ学生たちに障害のある人たちのアートに触れてほしい。

回答・対応

1. 施設見学・内容の確認

まずはアトリエを見学する機会を設け、活動する作家の様子や作品を見てもらう。その後、展覧会の企画内容を確認。

2. 展覧会準備を通して作家と関わる機会をつくる

展覧会で使用するキャプション等の準備のため、取材の日程を設ける。出展作家の創作現場を見てもらったり、作家にインタビューをしてもらったりと作家と関わる機会をつくる。

3. 展覧会の開催

展覧会を開催。多くの学生に見てもらう機会となった。また、展覧会後、準備から開催までの振り返りを学生と共に行った。

相談事例⑥…学生さんの感想

「私の夢は海外に展示されること」「僕の夢は漫画家として有名になること」と熱がこもった言葉を聞いた時は、今自分の将来を夢と現実の中で模索している私にとってとても羨ましく感じましたし、とても魅力的に見えました。障害のある方が「働く」という中で、表現という場を選び、ただ「やりたい」という感情だけでなく、しっかりと生きていくためのお金を稼ぐことができているという現状は、障害のある人ではなく、一人の人間として私たちと同じように今、世界を生きているという実績を提示していると思いました。作者の方はもちろんですが、サポートされている職員の方の力も大きいと感じました。

障害者の方々のアートは独特かつとてもアーティスティックなものすごく素敵なものばかりでした。また、何よりみなさんが心から芸術を楽しんでいるというのがとても伝わり、私も見習って芸術を楽しみながら世に発信していけるようになりたいと思いました。

「働くことは権利である」という視点に芸術が合わさって外に発信し続けられている現状を初めて知りました。お互いに影響し合う環境の中で自己と向き合い、作品にすることで社会に溶け込み、社会に求められるシステムが確立されていて、障害者の芸術を支援する重要な組織であると感じました。逆に障害のある人々が芸術の壁を打ち壊して教えてくれることが多く、新しい価値創造に社会が発展する機会を提示しているなと思いました。これからも注目したい団体だな！と思います。

好きなことを仕事にする、働くという権利を守る、というみぬま福祉会の理念に、ハッとさせられました。紹介された、どんな作品もすべて、作り手の〝私〟というものがあふれていて、目をひきつけられました。そして、私自身文章を書き続けて10年以上になりますが、最近上手い文章とは、キレイな文章とはと考え続けて筆が進まないことがあります。けれど、初めて文章を書き始めた時の、あの書きたくて書きたくてたまらない、という思い。自分を表現したいというあふれてしまった〝私〟を文章にするということを忘れずにいたいと思いました。

障害のある人も私たちと同じように様々なことに悩み、考え、自分の個性を見つけていくんだということに驚きました。個性的な方が多いので、最初から面白い個性的な作品を作ってしまうものだと思っていたので、同じような悩みを抱えていて、親近感がわきました。どんな素晴らしい作品も苦労なしでは生まれないのだと改めて実感しました。

今回の障害者の方々の作品を見て、感じることがありすぎてとても面白かったです。有名な画家やデザイナーの展覧会を見てさすがだなと思うことは多々あるのですが、考えつくせば答えが見えるような感じで、見続けられないなと思っていましたが、障害者の方々が描く芸術の数々は、まったく飽きず、とても魅力的だなと思いました。

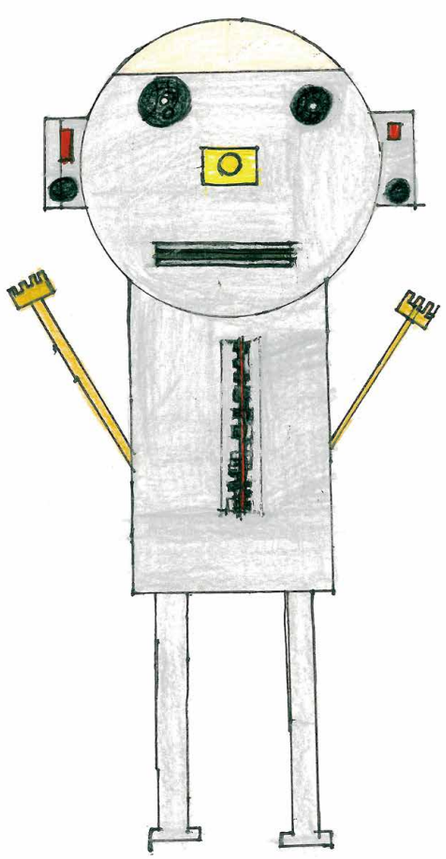
表現って本当に幅が広くおもしろいなーと思いました。これは偏見かもしれないですが、障害のある方はすごく細かい作業をしますよね！とても根気のいるような、ヒェ～となるような細かく繊細な絵を作っていてすごいなーと思いました。〝自分自身〟を表現することで、評価されるってとても直接的でわかりやすくて良いですね！メンバーでそれぞれ刺激し合い、切磋琢磨している姿、素敵です。ブラック企業と呼ばれる会社は見習ってほしいですね。

今日見たアートはとても興味をそそられた。どのような思考で形にし、表現しているのか様々な色彩から推測してみてもわからない所が面白く感じた。また作家のアートをこの先どうつなげていくか、どうアートをプロデュースしていくかもとても考えられていて、作られたグッズにはユニークな魅力があった。新しいブランディングの形で素晴らしいと感じた。

第Ⅲ章 まとめ

i 支援のいま
— 支援の現状と活動の成果 —

ii 活動のこれから
— 課題を踏まえて、今後の展望 —



今年度、広報活動にも力を入れました!

障害者の人が作品と、県内障害者施設の集まりで、埼玉障害者アートネットワーク(TAM=ターミナル)が主催する「絵画制作に取り組む20人の作品を集めた障害者アート展」が、春日部市大場の「喫茶ゆめいろ」で開かれている。

県内の出店の障害者施設などで絵画制作に取り組む20人の作品を集めた障害者アート展だ。春日部市の「喫茶ゆめいろ」で開かれている。

持ち寄った作品の数々は、スタンドバイミーの「個性的な絵をおけばひたすら描く」などと文字を組み合わせた作品だ。明るく楽しい作品が並んだ。

個性的な作品が並んだ（春日部市で）

2017.9.7 読売新聞

障害ある人のアート展 多彩に斬新に

障害がある人たちによる多彩な絵画や斬新なオブジェの企画展「うふふ♥地玉さんなのみつけちゃった♪」が、春日部市で開かれている。9月2日まで。

同市大場の福祉事業所「わっくす」併設の喫茶「ゆめいろ」を会場に、「福祉施設職員でつくる一埼玉県障害者アートネットワーク(TAM=ターミナル)」などが主催。県内10施設で活動している、身体、知的、精神の障害がある20人の作品を展示している。

ヤマダジュンヤさん(34)は、油性ペンで描いた「ラストポポ」「老犬と愛」「うら人間」の絵画3点を出品。5年前から本格的に描き始めた。「ひげメガネおやじ」をモチーフにした作品を多く手がける。「その日に受けた刺激や、喜怒哀楽の感情のままに色を選ぶ。でき上がった時の達成感と自分を進化する自分の絵に励まされています」

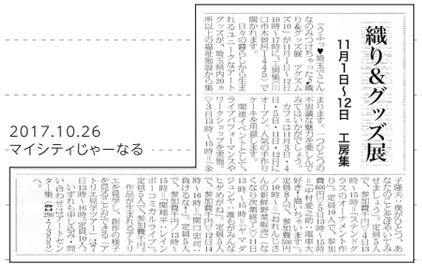
わっくすの豊田亜紀さんは「福祉や障害が身近でない人も気軽に足を運んでほしい。作る人や作風、その背景にも興味を持ってもらえたら」と話す。

午前10時半～午後4時。入場無料。9月2日午後1時からは作者4人のトークも。問い合わせはアートセンター集(☎048・2607・7315)。〔加藤真太郎〕

絵画3作品を出展したヤマダジュンヤさん＝春日部市大場の「ゆめいろ」

春日部 来月2日まで

2017.9.1 朝日新聞



織り&グッズ展

11月1日～12日 工房集

2017.10.26
マイシティじゃーなる

浦和区で障害者アート展

97人の個性 作品に

2017.12.8
埼玉新聞

6日からさいたま 障害者アーティストが作品展

表現の魅力 存分に発信

絵画、木工など300点

2017.12.3 東京新聞

2017.12.10
東京新聞ホームページ

自由な発想 余さず

あすまで 川越で障害者アート展

2018.2.11
埼玉新聞

おかげさまでたくさんの反響がありました。ありがとうございました。

Ⅲ まとめ ⓘ 支援のいま

—埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±〇実態調査・来年度に向けての活動に関するアンケートより—

支援の現状と活動の成果

今年度の活動の最後に、TAMAP±〇のメンバーに向けて各事業所・施設の表現活動状況や支援体制、この活動の成果などについてアンケートを行いました。

TAMAP±〇では、展覧会実践や研修の節目に、定例会で振り返りを行い、メンバーの気づき（成果・課題）を共有するようにしています。また、定例会の議事録や関連資料は後日、メールで一斉送信して各職場とも情報共有をはかっています。

活動や定例会が、日頃の表現活動支援の悩みや課題を語り合う場にもなっていますが、アンケートにより改めて支援の現状や意識を把握して、今後の活動に活かしていきたいと考えています。

＜TAMAP±〇参加施設の表現活動状況や支援体制について＞

2018年2月実施：回答21施設

TAMAP±〇にはどんな施設が参加しているか

- **発足年数**　平均26年（5～80年）
- **総利用者数**　平均145人（19～450人）
- **事業所数**　平均6施設（1～14施設）
- **職員数**　平均107人（7～450人）

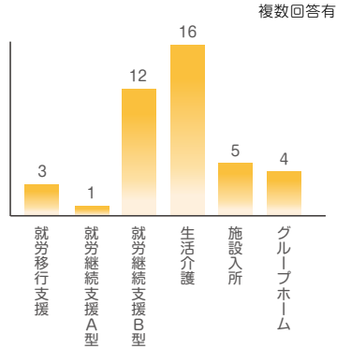
表現活動をどこでどのように行っているか

Q 表現活動を始めたのはいつから？

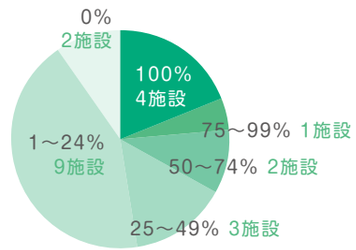
1997～2017年（平均2010年から）＊2施設はまだ活動を行っていない。

Q 表現活動を行っている施設の種類は？

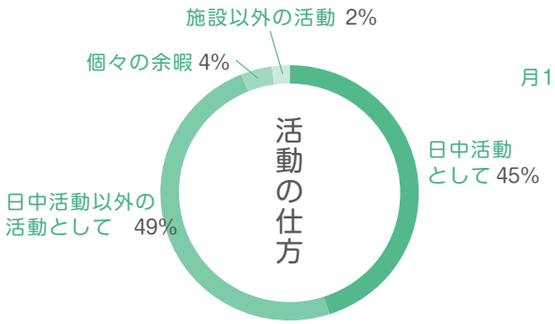
複数回答有

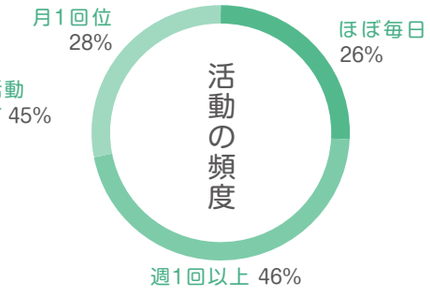


Q 表現活動をしている利用者は全利用者の何パーセント位？

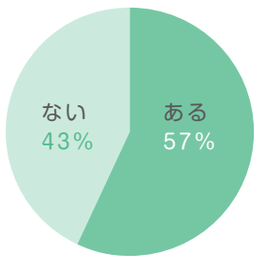


Q 施設での表現活動の位置づけと頻度は？

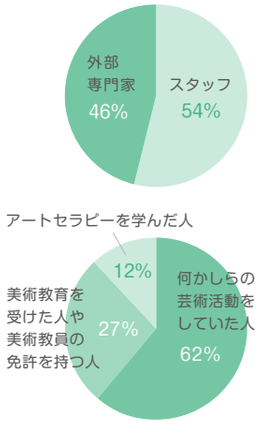




Q 芸術等の経験者や専門家のかかわりは？

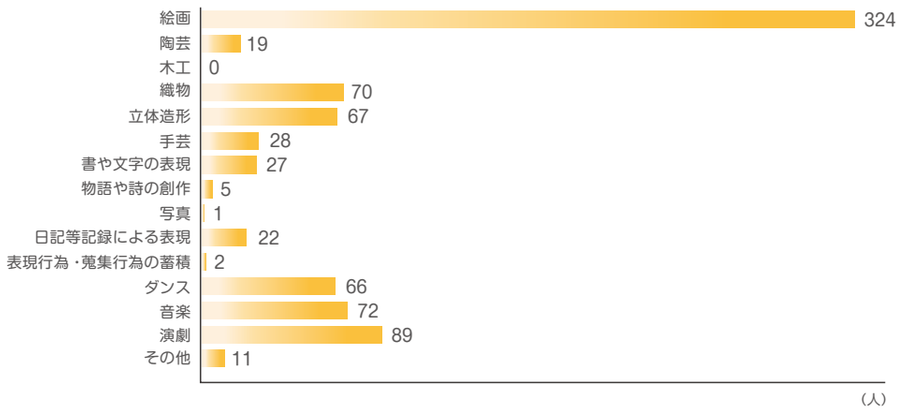


ある場合どんな人？



どんな表現活動を何人位がしているのか

Q 表現活動の種類とその人数は？（集計：TAMAP±〇全体の延べ人数803）

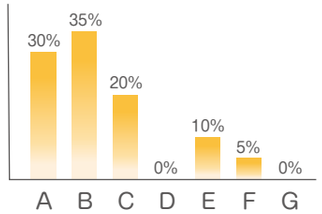


※グラフの数値は小数点以下四捨五入換算

表現活動をどう捉えているか　施設と個人との意識に違いはあるか

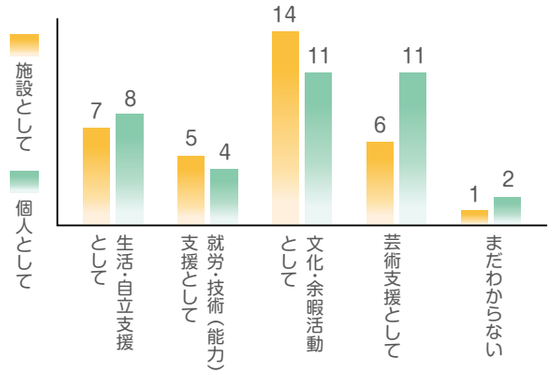
Q 表現活動の支援の体制は？

A　組織全体で行っている ―― 6
B　全体として関心はあるが、活動は担当の部門・職員に任されている ―― 7
C　全体の関心は薄いが、担当の部門・職員で行っている ―― 4
D　全体として関心はあるが、担当はなく、個々の職員が取り組んでいる ―― 0
E　全体の関心は薄く、担当もないが、個々の職員が取り組んでいる ―― 2
F　全体として関心はあるが、取り組みはまだまだ ―― 1
G　全体の関心も薄く、取り組みもこれから ―― 0



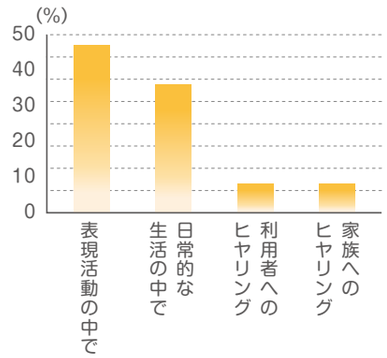
Q 施設として、担当者個人として、表現活動の支援をどのように捉えているか

複数回答有



表現をどのように発掘・発信しているか

Q 表現の把握方法は？



Q 県の表現活動状況調査に参加したのはいつから？

2009～2017年（平均2014年から）

Q 施設で展覧会を開いたことは？

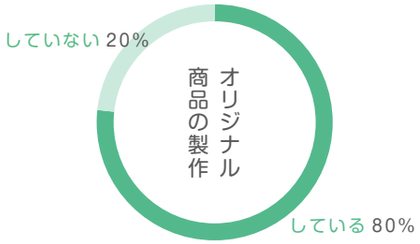
ある　11施設／21施設中

Q 一般の展覧会に出展したことは？

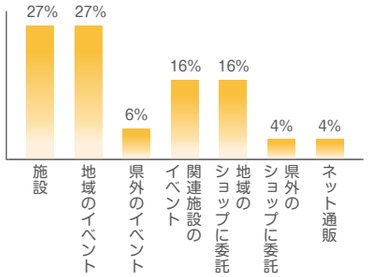
ある　6施設／21施設中

商品化に取り組んでいるか

Q 施設独自の商品製作は？



Q 商品の販売は主にどこで？



Q 販路の開拓方法は？

- イベント出店でいろいろな人とのつながりをつくり人づてに
- イベント等で知り合った方から
- 地域のイベントへの参加や研修などで話をして置かせてもらう
- 地域のつながりやイベントの参加、HPを通じての委託販売など
- 法人内事業所間の連携でつながりを広げている
- 技術を教わっている革職人の協力で販売先を拡大
- ビラ、ブログでの発信
- チラシ
- 口コミ
- まだ声を掛けられたら出品する程度

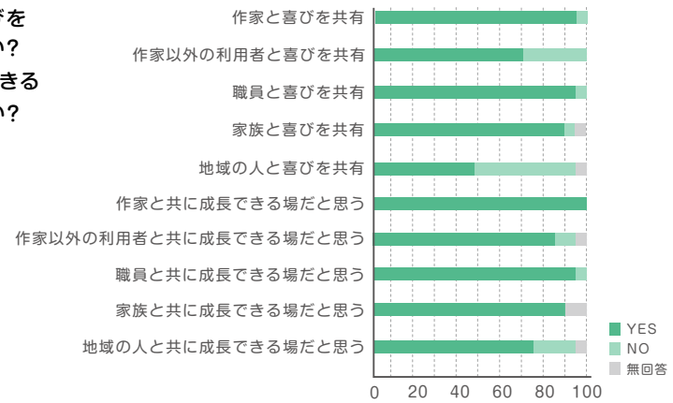
＜TAMAP±〇の活動について＞

TAMAP±〇の展覧会実践について

Q 施設の作家や表現の発信につながりましたか？

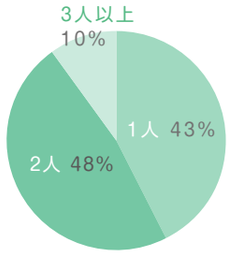
はい　19施設／21施設中　＊2施設は表現活動をまだ行っていない。

Q 展覧会により喜びを共有できましたか？また、共に成長できる場だと思いますか？

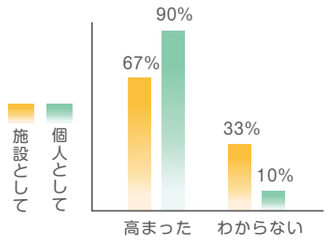


TAMAP±〇の活動は施設の支援に役立っているか

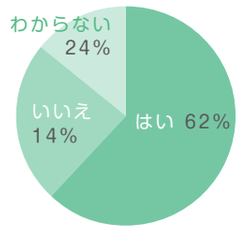
Q TAMAP±〇への参加人数は？



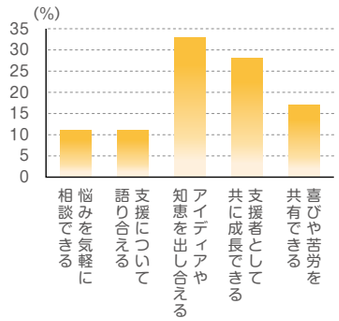
Q 施設や自身の支援力が高まったと思いますか？



Q 他の職員はTAMAP±〇の活動に関心を示していますか？



Q 定例会は参加者に対する支援の場になっていますか？ 一番いいと思う点は？

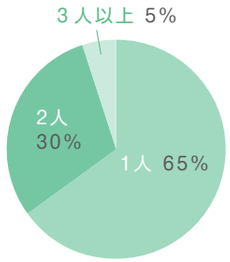


Q 他の職員と活動をどのように共有していますか？

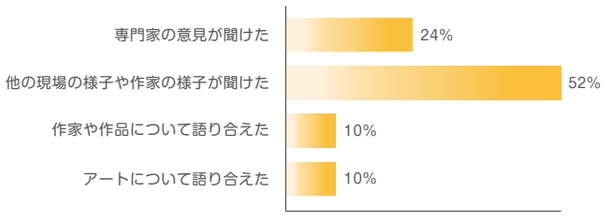
- 事業所内では職員やメンバーと定例会の内容や展示会の情報などをミーティングの時間を使いこまめに共有。法人全体の職員とは展示会の情報など、責任者会議や全体会議の際。またメールを使い共有。
- 定例会の報告、作品やメンバーの作品を作る様子を口頭で。グッズ会議の時は事前にミーティングをした上でのぞみ、報告を行う。これを繰り返す。
- 活動中や朝の連絡会・全体会議で報告。また、日中活動担当者で定期的に出展方法や活動内容について話し合う。
- 展示の情報、メールなどの交換。セミナーでもらった資料の共有など。
- 表現活動のあり方についてや、この活動を大切にする意義を伝える。
- 活動時や会議にて話をする。ポスターをきっかけに話す。
- 企画展の参加を一緒にしたり、実行委員会等で報告。
- 月1回の職員会議の場で報告。資料の回覧。
- 職員会議などで定例会の内容などを報告。
- 毎月1回の企画会議で進捗を報告。
- 会議の場で定例会の内容を伝える。
- 興味関心がある職員と共有。
- 翌日に職員会議での報告。
- スタッフ会議での報告。
- 作品展を通して。
- 会議で詳細を報告。
- 会議にて。
- 創作班としての取り組みの際。
- 商品の開発などの際、参考にしている。
- 美術指導の先生主体のため、まだ共有されているとはいえない。

作品選考会について

Q 作品選考会への参加人数は？



Q 参加してよかったことは？



美術以外の活動について

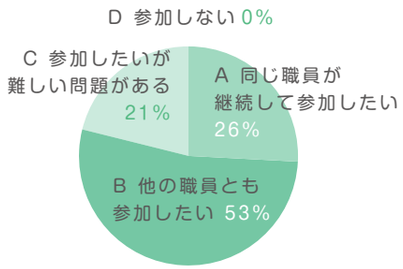
Q 舞台芸術の活動をしたいと思いますか？

はい　6施設／21施設中

具体的に

- コンテンポラリーダンス、芝居、紙芝居、人形劇のようなパフォーマンス・身体表現
- 利用者の可能性を広げる表現
- 今回のダンスワークショップのようなダンス・音楽

今後の参加について



Cの理由

- 人員不足。
- 施設での仕事内容が年々増えてきている。
- 活動拠点の川口市が遠い。
- 法人の事業や会議等が重なるため、参加頻度が少なくなってしまう。

アートセンター集について（求める役割）

- 個人の表現の発掘・調査、相談
- 参加してない施設への情報発信
- 支援活動の相談窓口
- 表現活動、支援方法、他施設の取り組み等の情報収集
- TAMAP±〇を統括するセンター的役割
- 施設間の活動をつなぎ交流を促すコーディネーター的役割
- 県内外への活動の発信
- 広く県内外のアート情報を集約
- 様々な人との交流を促す役割
- メンバー参加型のネットワークづくり

Ⅲ まとめ ⅱ 活動のこれから

アートセンター集と活動のこれから

課題を踏まえて、今後の展望

事業の最後に協力委員会を開き、今年度の活動について振り返り、課題や今後の展望について話し合いました。

相談支援

創作環境に関する相談には、表現活動を20年以上行っている当法人の経験を活かし、創作環境を積極的に公開して対応してきました。本活動の成果もあり、昨年以上に県内外から相談が増えてきたことから、今後も様々な相談が増えると予想されます。長年、当法人が培ってきた地域との連携や組織内の知恵を活かして、引き続き丁寧に対応していきたいと思っています。

個別の課題については、多くが地域の教育、支援学校や福祉施設のあり方など、社会全体の課題につながります。今後は、定期的に事例検討会を行うなど地域のニーズ（課題）を浮き彫りにして、ネットワーク力を活かし、より広く地域全体の課題として共有していきたいと考えています。

また、様々な相談に対応できるよう、アートスペースやオープンアトリエ、ダンスや音楽の活動場所など地域の社会資源の情報収集・把握にも努めていきます。

支援者の人材育成

施設間のつながりを基盤に県行政職員や美術専門家等と協働で開く展覧会づくり等を実践しながら、より一人ひとりが各職場の課題に合わせた支援力アップを目指せるような、段階的なプログラムづくりを検討していきたいと考えています。

権利保護や商品化の研修についても、「何のためか」といったこの活動が大切にしている基本を広めながら、より個別のニーズにも応えられるような機会をつくりたいと考えています。

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇

ネットワークでは、展覧会等の企画運営を軸にしながらも毎月の定例会を中心に、福祉施設職員にとってすべての活動が学び合いにつながるような展開をしています。施設独自の取り組みや地域への活動の普及に意欲的な施設も多く、「みんなで埼玉の表現活動を盛り上げて行こう」という連帯感のあるネットワークです。年々、横のつながりも広がっています。そのネットワークの長所を大切に、今後は他施設と展覧会を開いたり、地域ごとに研修会を企画したりといった支部ごとの活動も増やして、それを全体でバックアップしていきたいと考えています。

展覧会づくり

これまで同様、「埼玉県障害者アート企画展」を中心に、様々な人と協力しながら開催を継続していきます。多様な意見をくみながら、埼玉独自の展覧会づくりや展覧会の魅力をどう発展させるか、みんなで考え取り組んでいきたいと思います。

ダンス公演

美術だけでない「新たな可能性の発掘」として、今後は県や他団体とも協働で継続していきたいと考えています。

調査・発掘、評価・発信

今年度、埼玉県と連携して「表現活動状況調査」を行いデータベース化できたことは、これまでの県の取り組みを発展させ、障害者芸術文化活動支援センターとしても一歩前進する、大きな成果となりました。

調査票や選考方法などの課題を一つひとつ解決しながら、福祉施設職員と美術専門家が共に行う「作品選考会」など埼玉独自の手法をより汎用性のある「埼玉方式」として発展させることで、さらに障害のある人たちの表現やその活動の普及に努めていきたいと考えています。

県内においては、調査票の提出が1件もない市町村や回答が少ない特別支援学校に向けての情報発信にも力を入れたいと思います。

今後の展望

この埼玉の障害者芸術文化活動普及支援事業では、「福祉の現場から、障害のある人たちの表現の魅力を発信し、そのアートのパワーで、よりよい未来をつくっていこう！」といった思いを一つに、様々な人たちが力を合わせて活動しています。

２０１８年度も、９回目を迎える「埼玉県障害者アート企画展」を軸に、みんなで知恵を出し合い、一つひとつ課題を解決しながら活動していきたいと考えています。

表現活動の意義をどう発信するのか、その先のビジョンをどう描くのか――検討を重ね、活動を計画していきます。

埼玉に生まれる多様な表現と共に、みんなで社会に「問い」を発信し続けながら、より多くの人と表現から得る感動や学び、支援の喜びや活動の楽しさを共有していきたいと思います。そのためには、みなさまの力が必要です。

今後とも活動へのご協力ご参加をよろしくお願いいたします。

みぬま福祉会「工房集」の理念と取り組み

美術が得意な施設ではありません。「何もできない」と思われた仲間たちが自らの表現を仕事にしている施設です。

理念にもとづく表現活動

「工房集」は、社会福祉法人みぬま福祉会の一施設であると共に、22施設・事業全体で取り組む表現活動のプロジェクト名です。

施設としての「川口太陽の家・工房集」は、2002年に開設。アトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェを兼ね備えたプロジェクトの中心施設です。プロジェクト「工房集」では、普段からアトリエを公開したり一人ひとりの作品集を作ったり、展覧会やグッズ展、ワークショップなどを開催したりと、表現活動を社会につなげる様々な取り組みをしていますが、それらはすべて、表現活動以外の支援にも共通する当法人の理念にもとづいています。

社会福祉法人みぬま福祉会は、1984年、「どんな障害のある人でも受け入れる」を理念に発足しました。どんな局面でも「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切にしています。

表現活動は、1994年頃、既存の仕事に合わなかった一人の仲間をきっかけに、障害の重い仲間たちの仕事づくりを模索し続けたことから始まりました。今ではアトリエが10ヶ所あり、120人以上の仲間が日々、表現活動をしています。

その表現は、千差万別です。絵画、織物、ステンドグラス、木工、写真、書、詩、漫画、紙粘土…と多岐にわたる種類の中でも一人ひとりの表現は異なり、さらに日常的な行動による積み重ねや既存のジャンルに当てはまらない「これ何!?」と思われる表現もあって実に多彩です。

美術が得意な人を集めたのではなく、むしろその逆で、「何もできない」と思われた人たちの表現が、私たちの心を揺さぶり、工房集の表現活動を導いてきました。表現によって本人も仲間たちも私たちも家族も地域も変化し、さらに表現を社会に広げることで、人々の意識を変えたり固定観念を覆したりと、さらなる変化をもたらしています。

現在では、年に約30回もの出展依頼があり、国内にとどまらず、海外のギャラリーと独占契約を結んだり、ニューヨークやフランスのギャラリーで高く評価されたりする作家もいて、個々の作品がアートの世界からも注目され始めています。

また、企業の広告、ファッションブランドとのコラボレーション商品など、表現をデザインに二次使用される機会も増えています。

このような活動を長年、現場で積み上げてきたことを評価していただき、「埼玉県障害者アートフェスティバル」では、実行委員として、また、「埼玉県障害者アート企画展」では、ワークショップのリーダーとして、他の福祉施設や美術専門家などの関係者と連携して、県内の表現活動支援にも関わってきました。

工房集 プロジェクト

社会福祉法人みぬま福祉会が表現活動を行っているアトリエの一覧です。

みぬま福祉会の理念

1. 県南各地のどんな障害をもっていても、希望すればいつでも入れる社会福祉施設づくりをめざします。
2. 入所者は障害の種類や程度、発達段階等が充分考慮され、一人一人のニーズに応じた生活、労働、教育、医療が受けられ、ともに生きる「仲間」として、その自主性が尊重され、人権が最大限に守られるような社会福祉施設づくりをめざします。
3. 社会福祉施設は、その地域の中に存在し、その地域とともによりよい社会づくりをめざし、入所者は地域の人々と助け合いながら、ともに生きることをめざします。

仕事とは、支援とは

みぬま福祉会では、「どんなに障害が重くとも働ける。働くことは権利である」という理念のもと、仲間一人ひとりの仕事を模索する中から働くことは、「お金を稼ぐこと」に加え「社会とつながること」「仲間の豊かな発達につながること」の3つに定義しています。

障害のある仲間の「できる仕事を探す」のではなく、一人ひとりの異なる主体的な行動や表現に寄り添い一緒に試行錯誤しながら、「好きなこと、得意なこと、その人にしかできないことを仕事につなげる支援」をしています。

そして、美術が得意な人のアートや作業の合間に行う余暇活動の支援とは異なる日々の支援の先に表現活動がある、つまりは、誰もが表現の可能性を持っていると考えています。

ともに働き、ともに生活し、ともに地域をつくる仲間。私たちは、施設利用者を「仲間」と呼んでいます。

図は雑誌『庭 NIWA』
2017年1月号より転載（作図：長崎剛志）

【 工房集 】

日常的に場を開き、障害のある仲間、職員、家族、地域の福祉関係者、住民、ボランティア、さらに建築家、アーティストなど様々な人を巻き込んで、表現活動を社会へ広めています。

国内外の美術展への出展

カレンダー

作品集

BEAMS とのコラボ商品

みぬま福祉会はその運営・事業を支える後援会と共に歩んでいます。集カフェは後援会活動の一つです。作品展の余韻を楽しむための集カフェは、天井が高くやわらかな光が入る明るいスペース。人気の手作りケーキとこだわりの焙煎コーヒーでおもてなしをしています。一人でお茶をしながら作品をゆっくり眺める方や、作品を通して、ご家族、ご友人と交流されている方など、人と人をつなげる空間になっています。

アートセンター集　報告書　２０１７－１８
２０１８年３月30日発行

企画・編集・発行
社会福祉法人みぬま福祉会

アートセンター集
〒３３３－０８３１　埼玉県川口市木曽呂１４４５（工房集内）
ＴＥＬ　０４８－２９０－７３５５
ＦＡＸ　０４８－２９０－７３５６

アートセンター集ＨＰ　http://artcenter-syu.com/
工房集ＨＰ　http://kobo-syu.com/
みぬま福祉会ＨＰ　http://minuma-hukushi.com/

構成・編集　武居智子
編集協力　杉千種（con*tio）　ＴＡＭＡＰ±〇
写真　荒木隆男　今井紀彰　鈴木広一郎　武居智子　工房集
アートディレクション　水川史生（en design studio）
デザイン　藤沼重人（Type-f design room）　工房集
助成　厚生労働省「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業」

議事録やアンケートなど様々な記録をもとに編集しました。
事業にご参加ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。

©社会福祉法人みぬま福祉会
無断転載厳禁